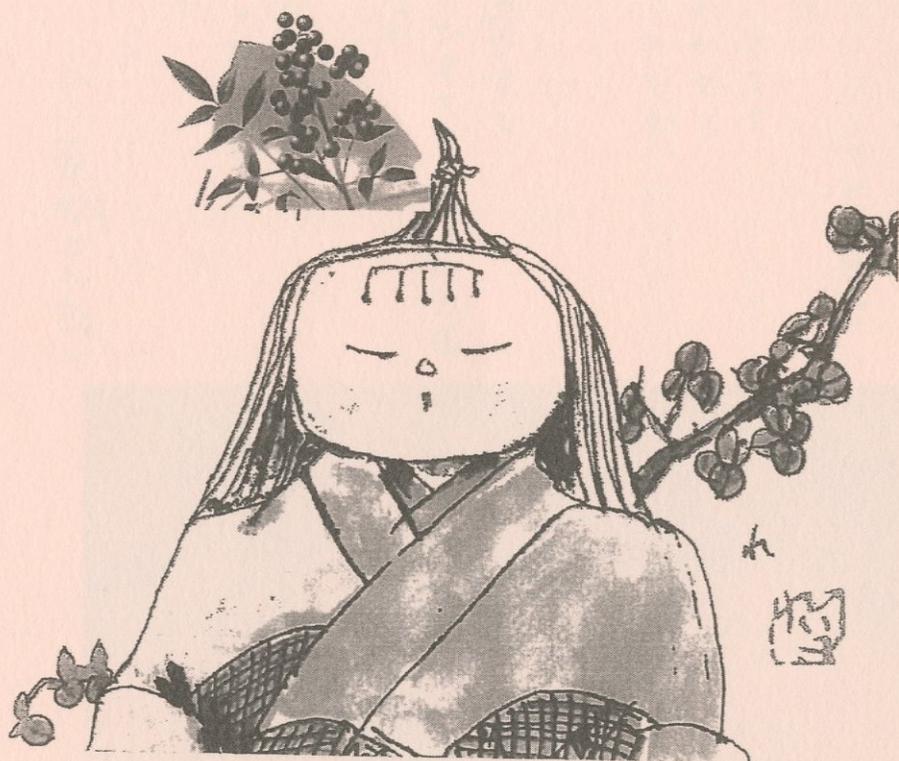


別冊 おなご



第三十九回 千三忌

紡ぐ別冊おなご特集号

39号

2024・8

セキさんはネ ホントに
 背の高いからーツとすたんで十
 見れば顔又な
 いつもニコニコでナ
 いや味 言われでも
 その場でおさめでナ
 えっつも ごんご
 ほうほうご燃やすて
 眼めちめちとすてる人たったご王
 煙りばりてなく
 息子征^だして
 息子に戦^な死^なれで
 泣いてるんじゃないかい
 子心も心にも
 / そう 思ったた

へ小原昭^{てる}さん談



「牛や犬の死んだようにしたくねえと思って、ながい間に
 少しづつためた金で墓石つくってやったす。オレ死ねば、
 戦死した千三を思い出してくれる人もなく、忘れ去られで
 しまうべと思って、人通りの多い道のそばさ建でだす」
 と、七十三歳になる母親の高橋セキさんは言うのだった。

〈小原徳志著『石ころに語る母たち』未来社刊より〉

目次

特集

「詩人・斎藤彰吾と小原麗子の活動」

「北上から世界へ、昨日から明日へ」展より……………5

麗ら舎読書会発行別冊おなご

39号で40年を迎えるこれまでの軌跡……………49

セキさんのことば
(小原昭さん談)

白モクレン…………… 渡邊 眞吾 …… 3

東北のおなごたちが読んだ森崎和江
柳原 恵 …… 25

姫ひまわり…………… 高橋 つか子 …… 40

坂の上から…………… 渡邊 満子 …… 41

佐藤恵美さんへ…………… 高橋 つか子 …… 42

俳句を詠む…………… 佐藤 恵美 …… 45

恵美さんを想って…………… 高橋 哲子 …… 47

第39回「千三忌」駄句を詠む…………… 57

あとがき…………… 佐藤 弘子 …… 59

編集後記…………… 高橋 哲子 …… 62

白木蓮

渡邊眞吾

最後の白鳥の隊列が
残雪光る山脈を越えて
北へ旅立って行つた
その啼き声をかき消すように
春の嵐が吹いていたが
花冷えのする朝
鉛色をおびた青空がひろがり
白木蓮が咲いている
昼のシャンデリアのように
花のひとつを手にとつてみると
人肌のような花びらが九枚
その花弁にしっかりとくるまれて

萌黄色を抱くように

あわい紅色の花心がある

嗅いでみると

清浄な香りが鼻孔を通り

ほの甘い匂いがあつた

うすクリーム色の花々は

陽の光を受けて純白にかがやき

空をゆるがしている

西風はまだ冷たかつた

毎年冬荅（つぼ）み耐えて咲くのに

今年も初めて見るように

妻と空を見上げている

四十年ほど前の

高校三年の四月

鉄筋コンクリートの校舎の

薄暗い階段をおりてくると

妻が踊り場で笑つて立っていた

白木蓮

すれ違ったとき
 私といつか結ばれる予感がしたと
 こともなげに妻は話している

あの日の午後

白い校舎のだらだら坂をくだり

右へ曲る小径をくると

褐色に痛んだ花びらを散らしながら

白木蓮が咲いていた

これから幾たびかの花を見て

やがて私たちも旅立つだろう

そのあとにも

洗い晒しのような空気を

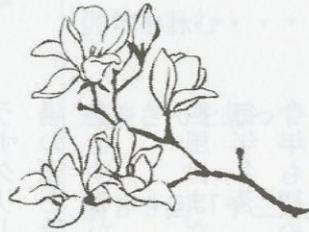
さらにさっぱりさせて

白磁の皿に盛られるように

ハクレンの花は咲いているだろう

詩集

村境より



『新編北上市史 資料編 現代』編さんに呼応して

「詩人・斎藤彰吾と小原麗子の活動」

―北上から世界へ、昨日から明日へ―展より

- ▽会期 2023年7月8日(土)～8月6日(日)
- ▽会場 日本現代詩歌文学館 2階ホワイエ
- ▽企画・編集 日本現代詩歌文学館

〈作品抄〉

選挙告示第一号

飯豊農協選挙告示第一号

飯豊農業協同組合役員選挙規程第二条による
通常選挙を次の通り行う

記

- 一、投票開始の時刻 三月二十二日 午前八時
- 一、投票終了の時刻 三月二十二日 午後四時
- 一、投票及び開票所 飯豊支所

一、選挙する理事 監事の数 理事八人 監事三人

一、投票用紙に記載すべき選挙する理事監事の数の数 理事一人 監事一人
右、飯豊農業協同組合役員選挙規程第三条により公告する。

昭和三十七年三月十二日

飯豊農業協同組合

組合長理事 高橋慶五郎

各組合員殿

北の国の三月の風は
時に突風に変るのだ。

第一農業倉庫 その板壁に

ピタピタと画鋲が十九

「鬼が出るか蛇が出るかってんだ

まさしくこのピラからネエー ハハハハ……」

エグチ・チエ子嬢

あばずれ口調でももの申す。

メガネの飛脚がとぶそうだ
まるで疾風。

沼田部落から中館部落に
飛火がとんで票がゴッソリ
行ったというではないか。
源吉候補の口髭ピンとはねる。

「鬼が出るか、蛇が出るかってんだ！」

父 馬鹿正直と言われ
百姓に 身をすりへらして息絶えた。

土にぎったその手

娘、レイコに乗り移り臍はらわたの中で爪磨く。

目やにためた眼

娘、レイコの臍はらわたの中で

ランランと赤い眼光と変る。

「父の怨み はらしてくれるかってんだ！」

「近代化資金にのまれるなってんだ！」

「鬼が出るか 蛇が出るか

選挙のふたあけ

おたのしみ——ってんだ。ハハハハ………」

* 『微塵』11号（62年6月）に発表。詩集『サワ・ひ

とりのおんなに』（67年6月／私家版）のち『小原麗

子詩集』（78年5月／青磁社）に収録。職場である農

業協同組合に貼り出された選挙告示のピラと、それ

を前に政治談議を交わす内部の人々の会話に材をと

った作。同僚と思われるチエ子嬢の「あばずれ口調」

と乾いた笑い声は「レイコ」の中に取り込まれ、亡

父の恨みとも一体化し、増幅される。その声音は、

冷たい風にかき消されそうになりながら、哀切さを

もって響いてくる。微細な描写や人々の生き生きと

した声によって、生活記録を詩として再現していく、

小原の手法の巧みさを見出すことができる。

サワ・一人の女に

生れた土地を
出てしまったサワだ。

それなのに、稲株腐蝕する泥田に
腰はどつぷり、ひたりの灯籠を式代の直ぐ
はいあがることはできない。

ガラスは磨かれ、紙の花色こくても
街はあらゆる腐臭のたまり場。

下水はあふれ、家々の裏口におしより
清潔なのは

村の人ふんだと思つている。
生れた地はおふくろの根だ。

兄はやさしく、頑丈で無口。
涙など流すまい。

姿見せぬ
村の掟にはみ出た者は

無数のキバに喰いあらされる。

サワは快活に、村人は信頼をこめて
だが、いまだ嫁にゆかぬのは、どうしてなのだ。

村はたちきれぬサワに
村はいよいよ住みにくく。
足ふむ、土地などなく、
ひとりでやってみるまでのこと
カラリ、言い捨てて
村を出る。

（絶望感、反逆
それらは臓腑に固くつつみ）
村を出る。

己れの汚物にまみれ
誰にもみとられずに、死んでいった
年とつたおなごの話。
それでもおまえはよいのか……

村の呪文はあとをたたず
ベツトリまといつく。

二人の肉体からだのほてりの中にあっても 人はひと
りだ。

人ひとりだから二人になりたいと願うのかサワ。

異国の土に売られ

墓石もなく

“過労・栄養失調・性病・風土病”

そんな女達の鎖 無数に背負って

サワは歩き続ける。

おふくろの爪 土かきむしり

五人の子 髪ふりみだし 育てた力の重み

背負って サワは歩き続ける。

*『ゲエ・ダ・ゴ』2号（65年10月）に発表。詩集『サ

ワ・ひとりのおんなに』（67年6月／私家版）の末尾

に収められた。のち『小原麗子詩集』（78年5月／青

磁社）に収録。重たくまとわりつく「稲株腐蝕する

泥田」に象徴され、「掟」や「呪文」として繰り返さ

れるのは、「サワ」が直面せざるを得なかった「村」

と「家」と「女」の問題である。「おふくろ」や「年

とつたおなご」の姿と向き合い、さらには「異国の

土に売られ 墓石もな」い女たちとも連なることで、

その問いは深められていく。無数の鎖を断ち切るの

ではなく、携えたまま進むもうとする歩みは、痛みと

苦しみを伴っているが、力強い。

「選挙告示第一号」に登場した「レイコ」よりも、

抽象的かつ重層的な詩の主体である「サワ」が、そ

れらを背負い、語ることを可能にしたのかもしれない

。 「サワ」は、小原が獲得していく「おなご」とい

う視座の先駆型とも言えるだろうか。

家

田畑が暮れても
だれも帰らなかつた

暗い家の中に電気が一つ灯ると

一日中人の入らなかつた

台所の板間はザラザラでいつそう暗い

少女は泣くまいと声を殺し

囲炉裏にしゃがみマッチをする

湿ったマッチの軸はなかなかともらなかつた

ともらなかつた囲炉裏もいまはないのに

雨の降り続く日の夕暮れ きまつて

煤の塊が ボタリと落ちる

この家の掟に従い囲炉裏にしゃがみ続けた

女たちの怨恨が ボタリと落ちる

暗い梁に漆のようにはり付いて

女たちの怨恨は 垂れ下る

嫁ぎ先では食うものも食わせて
もらえぬと訴えた叔母も 家を出て
家に呑まれそのあがきの癒えぬまま
ぜいぜいと喉をならし 逝つた

深夜

杉の木立を抜けて家路につくと

ふいに屋根がせまってくる

ひるまかき消されていた家々の

湿つて重い萱葺き屋根が村ぜんたいを

圧しているその様が

夜目にくつきり視えてくる

* 『北上詩の会会報』 24号（67年3月）に発表。改作

の上『小原麗子詩集』（78年5月／青磁社）に収録。

引用は後者によつた。台所の梁にはりつき、ボタリと落ちる煤の塊から「女たちの怨恨」を想起するエピソードは、『家』Ⅱむらの中の声（『思想の科学』

73年3月)でも語られているが、この詩では、囲炉裏とともに、かつてそこにしゃがみ続けた少女や叔母たちの「いまはない」姿が、雨音を連れて頭ちあがってくるのが印象深い。その怨恨は、村全体を圧する「湿って重い萱葺き屋根」にも重ねられる。小原は真昼の光の中ではなく、深夜の闇の中にこそその様を捉え、書き留めようとしている。

二階棲み

火と水が買えるので、アバのやうに二階に棲みつくことができた

棲みついたのは他人の家の二階なので庭というものがない
それで他人の家の庭をわが庭のように

眺めてくらす方法も手に入れたという次第

他人の家の庭にはきまつて

垣根があつたしあわせになるために回す

垣根やブロック塀が人を不自由にさせている

その様が視えてくるのも

二階棲みのせいかと

思う次第

火と水がそなえられ

二階は女のひとりぐらしも可能にする

私たちの怨恨がボタリと落ちる煤も火柵も見あたらぬのに

火焰の娘 氷柱の娘

海にかこまれた国に生まれ

父たちよ わたしはあなたの娘だ

兄たちよ わたしはあなたの妹だ

わが娘 わが妹を守ると言つて

銃を持ち

海に向こうの国々に征つた

父たちよ 兄たちよ

あなたたちは

異国の娘たち 異国の妹たちに

何をしたのだ

父たちの年齢をはるかに超えて

兄たちの年齢の二倍は生きて

かの地の火焰の娘

氷柱の娘を抱けば

父たちよ 兄たちよ

あなたたちは

実の娘 実の妹に

銃を向けている

*『別冊・おなご』12号（93年11月）に発表。「わたし

にとつて、従軍慰安婦とは『火焰の娘 氷柱の娘』で

す。」の言に続き、「あとがき」に掲載されている。

同号は、小原が85年から行つてきた「千三忌」の第

9回に合わせて発行された。小原は、柳原恵（「化外」

のフェミニズム）（2018年3月/ドメス出版）に

収録されたインタビューで「女性という立場にい
るとね、韓国の女性も、世界中の女性が、女性なん
ですよ」と語る。「サワ・一人の女に」と同様に、心
情を整理し、現在地を確認し、「おなご」の視座から
未来を見据えようとするとき、詩という表現の手段
が小原を支えている。
（抜粋・解説Ⅱ日本現代詩歌文学館 濱田日向子）

〈記念座談会〉 * 一部抜粋

参加者

- ・ 斎藤彰吾 (詩人、北上市本通り在住)
- ・ 小原麗子 (詩人、北上市和賀町長沼在住)
- ・ 大門正克 (早稲田大学特任教授、新編北上市史編さん 近現代部会員 (現代班))
- ・ 山本唯人 (法政大学大原社会問題研究所特任准教授、新編北上市史編さん 近現代部会員 (現代班))

はじめに

【大門】昨年 (2021年) 秋、麗子さんのお宅で、麗子さんと彰吾さんから、雑誌『微塵』や『くらし』『化外』の話を手本さんと私でお聞きしました。『新編北上市史 資料編 現代』の編さんのためにお伺いしたわけですが、その時の話が良し雰囲気膨らみ、大変盛り上がったので、これをどこかに記録しておけないかと考えました。また、これらの雑誌の中身を『新編北上市史 資料編 現代』に掲載するだけでなく、ユニークな

表紙やそのほかに出された詩集などもあわせて多くの市民に観ていただき、同時にお二人の歩んで来られた道を皆様にご紹介するような企画ができないかと考えました。それで詩歌文学館に相談したところ快諾を得て、企画展の開催を前提として、そのパンフレットに掲載するために、今日の座談会を行うことになりました。

今日は三つの雑誌を中心として、それぞれの時期に分けて、お二人のお話を伺いたいと思います。

一つ目は『微塵』の時代です。北上の人たちにも大きな影響を与えた60年安保のあとの1961年、「わたしたちの詩運動草案」を第9号に発表して、『微塵』が再編成されます。それから64年の17号まで続き、彰吾さんも麗子さんも深くこの雑誌に関わられています。これが一つ目の時代。そのあと、麗子さんは『くらし』の編集長をされます。その1969年から76年までが二つ目の時期です。三つ目は彰吾さんたちが中心になって出された『化外』の時代です。1970年代半ばから、

80年代にかけての時期に当たります。つまり、60年代の初めから80年代にかけての時期について、三つの雑誌を中心にしながら、お話を伺いたいと考えています。(中略)

2. 『くらし』

—聞き書き—

【大門】 それでは第2部『くらし』編に移りたいと思います。第1部『微塵』編ではいろいろなことが判ってきて、大変興味深かったです。

次は麗子さん中心にお話を伺います。『微塵』が64年に終わりますが、その後も読書運動はずっと続けられていて、図書館の読書運動には彰吾さんも麗子さんも関わられています。でも、青年たちが村からいなくなっていくように、岩手県では60年代半ばくらいに読書運動も曲がり角に差し掛かり、担い手がいなくなってきた。そうしたなかで、女性を編集長にするんです。初代編集長は麗子さんでした。そして、サークル単位の加入ではなくて、個人加入に変えている。

【麗子】 そうですね。個人で参加しているということですね。

【大門】 先ほどの「自分を大事にする」という話と共通していて、読書運動も個人の単位としている。それと、麗子さんから3人続いて女性が編集長になっている。69年から76年まで、初代として麗子さんが務めています。

このときに「聞き書き」を始めて、『くらし』に毎号それを載せています。麗子さんが自分でガリ版を切って、例えば「高橋治子 23歳の生活と意見」、「柴田美保子 30歳の生活と意見」。

【麗子】 みんな若い人たちですね、意外に。

【大門】 「菊池忠雄 66歳の生活と意見」(一同笑)そしてあの有名な「一条ふみ 48歳の生活と意見」。

【麗子】 へえー。あの人(一条ふみ) 1925—2012 / 一戸町の農民作家)の家に行つて泊まったことがあります。

【大門】 高橋フサさんも出てきます。「高橋フサ 43歳の生活と意見」。

これがおもしろいのは、個人の名前が出ている

ことです。単なる聞き書きではなく、自分と個人を前面に出して、その「生活と意見」として書いていくところですよ。

【麗子】 自分史みたいなものですね。

【大門】 これは間違いなく麗子さんの編集長としての編集方針だと思うんです。当時、『くらし』で毎号のようにやっていたこの聞き書きのことで覚えていたことはありませんか。

【麗子】 カセットテープで録音していたので、文字に起こすのがものすごく大変でした。すぐく長い時間がかかりました。

【大門】 72年当時、カセットテープはあったかな？ リールテープでしょうか？ いずれそれを文字に起こしてガリ版に切ったわけですか。毎号のようにやっていますから、かなりの量になりますよね。

【麗子】 そうです。でも、自分としては職場に行つて仕事をするのに比べたらまるで楽だったんです（笑）。遊びとまではいかないけど。

【大門】 そうなんですか！ 当時職場の仕事では

どんな気持ちだったんですか。

【麗子】 金融の窓口にいて現金の出し入れをしていました。それを毎日閉めて、そして金額が合わなければ帰れないんです。ずい分遅くなつてから帰ったこともあります。絶対に間違えられないんです。

【大門】 それと比べれば楽だということですか。夜家に帰ってから『くらし』の編集、テープ起こしやガリ版切りをしていたんですね。

【麗子】 そうですね。夜とか、休みの日とか。そういうのは頼まれたんじゃないやなくて、好きでやっていたことですからね。

【大門】 『くらし』には読者からの便りも載っていました。読書サークルの機関誌というのではなくて、会員の個人個人が楽しみにしているという雰囲気を感じるんです。

【麗子】 そうですね。楽しみにしていたと思います。

——「おなご」の重み——

【大門】 農協のことを書いた『微塵』の文章で、

麗子さんは「おなご」という言葉を使っています。「くらし」の編集後記にも「おなご（おなご編集長）」と出てきます。

彰吾さんからは、「おなご」という言葉はこの辺では少し軽い感じで使われると聞きましたが……

【麗子】「おんな」というより重いですね。「おなご」と言うと、そこに生活、暮らしが入ってくるんです。だから重いんです。

【大門】麗子さんが「おんな」とか「女性」ではなく、ずっと「おなご」という言葉を使うのは、地域で使われている言葉であるからとか、そこに暮らしが入ってくるからということですか。

【麗子】そうですね。この地域では「おなごわらす（童）」「おとこわらす」とか言いますね。

【大門】「おんな」と言うと、少し澄ました感じがするんでしょうか。

【彰吾】そうですね。私は「おなご」というと漬物石を思い出すんですよ。

【麗子】なるほど。どしってして重くて、ちよっ

とやそつとじゃ動かない石ですもんね、漬物石は（笑）

【大門】そこに生活が入っているんですね。

【山本】それは生活そのものですね（笑）

【大門】なるほど、おもしろいですね。

—石川純子の登場—

【大門】この『くらし』のなかに、石川純子（1942-2008）さんが出てくるんですよ。

高群逸枝（1894-1964）詩人、女性史研究）論をここに書いて、その後も何回か書いていて、『通信・おなご』にもずっと書くじゃないですか。この石川純子さんとの出会いで何か覚えていることはありますか。

【麗子】純子さんは水沢の人です。私が森崎和江（1927-2022）福岡県の詩人・作家）の話をしているということを、水沢の人が純子さんに教えたそうです。それで彼女が私に会いに来たんです。それで『くらし』に文章を書くようになったんです。東北大学を出た人ですから、研究者と

して書いたんじゃないですか。

【大門】『くらし』は北上市立図書館にかなり揃っているんですが、1冊だけ欠けている号があった、それは石川純子さんが高群逸枝のことを初めて書いた号でした。麗子さんの御宅にもないという話でした。40号だったかな。その次の号に麗子さんの感想が載っていて、この純子さんの文章を読んでいると涙が出てくると書いています。胸が締め付けられるような感じがすると。

多分、あの頃の石川純子さんは高群逸枝を通して、女性の問題と格闘していたんじゃないでしょうか。

【麗子】私と純子さんと二人で、高群さんの夫（橋本憲三、逸枝を支えた）に九州まで会いに行ったんですよ。

【大門】『くらし』の他の号を読むと、石川純子さんにとつては、そこ（高群逸枝の存在）をどうしても通過しなければならぬと、格闘している感じがします。

純子さんは恐らく、麗子さんと出会って、麗ら

舎読書会に参加するようになって、はじめて場所を得たんじゃないでしょうか。

【麗子】そうだと思いますね。彼女も文章を発表する場所を得て、私も純子さんに書いてもらえどありがたいので、それで付き合い始めたんだと思います。

【大門】それだけではなくて、ここに居て良いんだという自分の居場所、落ち着く場所も得たんだと思うんです。落ち着く場所であり、書く場所、それが麗ら舎読書会とか、『通信・おなご』だったんでしよう。そして、純子さんは麗子さんと出会って、初めて高群逸枝とか、女性を巡る問題などを正面からきちんと議論することができたわけです。

【麗子】なるほど、確かにそうだと思います。

【大門】だから、その後『通信・おなご』にも熱心に執筆を続けていきますよね。麗子さんの後押しもあつたわけですけど。そうした流れも『くらし』から始まっていて、『通信・おなご』に続いていきます。

76年から個人誌『通信・おなご』がはじまっていますよね。『くらし』とすごく似ている面もありますが、新しく武田礼子さんの昔話とか、「橋を渡る日々」でしたか、麗子さんの文章もはじまって、『くらし』よりも多彩な文章が載るようになりしました。

こうして『くらし』と『通信・おなご』を並べてみると、先ほどの「壊滅ではなく蘇生のために」で示された「自分と地域を拠点にする」ということが、まさに実践されているんです。個人誌『通信・おなご』は自分を拠点にして、ガリ版も自分で切って、編集してまとめている。そこに人が集まって来るんですが、それはサークルとは違って、後の麗ら舎読書会と同様、一人一人が個人の立場で、自分に責任を持ちながら集まっている。だいたいそんな感じに捉えて良いですか。

【麗子】なるほど、そうですね。

【大門】『通信・おなご』になると、折居ミツさんが登場します。後に『満州に幼な子を残して』(1

980年8月、青磁社)にまとめられる連載をしていきますよね。この出版は麗子さんが後押ししたんですね。

【麗子】そうですね。私がまとめて青磁社に頼んだんです。

【大門】後に麗子さんは、農家の女性たちの何冊もの詩集出版に尽力されますが、この段階では、石川純子さんと折居ミツさんが女性の書き手として登場するのを後押しされていますね。この動きもそれまでにはなかった取り組みですね。

【麗子】そうですね。(『通信・おなご』には)ミツさんの夫の次郎さんも書いてますね。

【大門】書いてますね。次郎さんが「子どもを殺した経験ねエ」と言った、それに対して「それだけはやわらないでしろ」って、ミツさんが言ったという、これは大事な、すごい話ですよ。

【山本】石川純子さんは年齢はだいぶ若い方ですか。

【麗子】ええ、私よりなんぼ若いんだろう。十は違わなかったね。学校の先生をしていましたね。

(麗子35年、純子42年生れ)

【山本】一緒に聞き書きなんかもしたんですか。

【麗子】彼女は彼女自身で聞き書きをしましたね。

それを立派な本にもしていますよ。

【大門】草思社から女性の聞き書きを何冊か出していただきましたね。(『名生家三代、米作りの技と心』

98年10月/『さつよ唄 おらの一生、貧乏と辛抱』
2006年6月)

これは麗子さんに倣ったとも言えるかも知れませんが、純子さんは最初高群逸枝論に取り組んで、その後は高齢の女性の聞き書きを活動の拠点としていきました。

【山本】ある時期、一緒に『おなご』を作っていたというわけではないんですね。

【麗子】そう。でも、年齢は違うけれども私にとつては一番話の判り合える、通じる相手でした。

【山本】じゃあ、麗子さんにとって、純子さんの登場や存在はすごく心強かったわけですね。

【麗子】そう、この人と会ってほんとうに私は良かったと思います。

【山本】一緒に九州まで行くなんて、なかなかす

ごいことですよ(笑)

【麗子】あの人は高群逸枝のことを書き続けていて、高群は亡くなったから、その夫(橋本憲三)

に会いたいつて言うんです。それで私もついて行ったんです。そして、九州で会ってきました。

【山本】麗子さんが若い世代の女性から学んだり、刺激を受けたりしたこともあるんでしょうか。

【麗子】純子さんは私とそんなに年齢は変わらないから。それより若い人からということはありませんが、特別に付き合うということはありませんね。

【大門】麗ら舎読書会のなかでは、純子さんはちよつと一人だけ鋭さが違うというような存在だったんじゃないかな。ぼくは千三忌とかで麗ら舎に伺ったときに、2回か3回お会いしてるんです。まだお元気だったころのことです。いずれお話を聞きたいなと思っていたら、亡くなってしまったんです。

【麗子】純子さんは一番心の許せる相手でしたね。

【大門】 純子さんの側でも、麗子さんへの信頼度は高かったんでしょね、きっと。

【麗子】 それは判らないです（笑）。判らないけれども…

【山本】 きっとそうだったんだろうと思いますよね。純子さんは元々岩手、水沢の人だったんですか？

【麗子】 岩手じゃなくて宮城だったんです。結婚して水沢に越して来たんです。結婚したのが水沢の人だったのでね。

【山本】 町なかで育った人なんですか。

【麗子】 町なかではなかったですね。岩手との境のところまで育ったと言っていました（佐沼、現登米市）。

【山本】 じゃあ、農村の育ちということと共通点があったんですね。

【麗子】 そうですね。そういうことだったと思います。

【山本】 自分より若い世代の人とそんなに気が合うというのは、そうはないことですよ。

【麗子】 そうですね。あれだけ話が合うというのはそんなにないことですね。幸運に恵まれました。良かったです。

—女性問題の先駆者として—

【山本】 麗子さんは基本的には一人で何かをやっていくということが多いんですか。詩というと同人を募ってグループでやることが多いですよ。

【麗子】 グループには入ってますよ。北上詩の会の会員ですし、麗ら舎読書会もそうです。自分は主宰していますけど。そういうところに集まって来る人たちとはずっと交流を続けています。一人だけれども、一人じゃないということなんだろうね。

【山本】 麗子さんが『通信・おなご』をやっている時代は、彰吾さんたちは『化外』をやっていますが、『化外』には麗子さんはあまり登場しませんでしたね。

【麗子】 そうですか。ほお。ああ、そうですね。『化外』は女性問題は扱っていないんじゃない

かな。

きます。

【山本】『化外』の一番最後の方に中野鈴子（1906-1958／福井の詩人）について、評論と
いうか評伝のようなものを麗子さんが4回書いています。この時期には中野鈴子にも関心を持たれていたんですね。

【山本】とは言え、『化外』はあまり女性問題を扱わなかったんですね。だから麗子さんがそれほど書いていないというのは納得しました。

【大門】今の話からすると、麗子さんは『微塵』の時から「おなご」という言葉は使っているんだけど、まだそれを前面に出していくという感じではなかった。『くらし』になってその片鱗は見えるんだけど、それがはっきりしてくるのが『通信・おなご』ですね。この時期、一方に『化外』があるんだけど、そこでは女性の問題は扱っていない。だから『化外』にはあまり関心がなかったということになるのかな。

【山本】そこで分岐したんですね。『通信・おなご』には詩もあるけど、生活記録とか散文が出てきます。昔話、民話を集めたり、聞き書きをやったり。それからお便りもたくさん載っています。『くらし』よりも小原麗子編集長の自由度が増してきますね。決して大きい雑誌ではないんですけどね。

【山本】縦横無尽の感がありますね。当時やりたかったこと、全面的にそこで始めたこと、という印象です。

【山本】『化外』はもつと理論的だし、作品としての詩を展開するから、そういうなかには入って行きづら
いというの
は判ります。「化外は女性問題を扱っていない」というのは、かなり良い証言を得られたように思います（笑）

【山本】でも、同人ではないけれども、会友っていう制度があつて、そこには麗子さんも名前を連ねているので、読んではいらっしゃったんですね。

【麗子】はい。もちろん。

【山本】たまに詩の寺子屋っていう、集会みたいなものが企画されていて、そういうときには麗子

さんも登場して、活発に議論されています。だから、やはり読んではいいて、関心はあったということでしょうか。

【麗子】 寺子屋は温泉なんかでやっていましたね。

関心があったというよりも、彰吾さんが本を送って寄越すからね（笑）

【山本】 会友ってというのは、会費は要らないんですか。

【彰吾】 そうです。お客様です。

【山本】 でも討論会のようなものには参加して、発言されたりしているから、詩の問題にも関心はあったんですね。真壁仁が山形から来たときも、参加して語り合っています。

【麗子】 行きましたね。あの方がせっかく山形から来るからと。

【山本】 真壁仁の言うことは：

【麗子】 判りますね。

【山本】 共感していたということでしょうか。

【麗子】 そうですね、はい。

【山本】 だけど、真壁仁も特別女性について論じ

たりはしていないですよ。

【麗子】 そうですね。女性問題を論じたつていうのは聞いていませんね。

【山本】 当時ほかに意識したり参考にしてた人は誰かいるんですか。

【麗子】 岩手県には大牟羅良（1909-1993）『岩手の保健』編集、著書『ものいわぬ農民』

ほか）という人がいましたね。あの人の書いていたものは読みました。

【大門】 大牟羅さんに影響を受けましたか？

【麗子】 大牟羅さんには： 受けていないね。

【大門】 そうですよ。麗子さんとは違いますよね。

【麗子】 岩手県のことや農民の貧しさなんかは論じるけれども、女性問題はなかったね。

【大門】 女性問題を論じないのもそうだし、もう一つ前の世代なんですよね。

【山本】 なるほど。でも、岩手にそういう人がいたつていう意味では、当然視界に入つてはきますよね。

【大門】でも、受け継いではいないんだよ。

【山本】女性問題を扱っていないという意味では、当時それを扱っていたグループってほとんどないですよ。逆に言えば。

【麗子】ないですねえ。ほんとにどこにも、東北を見渡してもないですね。

【山本】そういう意味では麗子さんが先駆者だったわけですね。

【麗子】東北の一条ふみさんの家に泊まったことがありましたね。

【山本】一条さんはどういう人なんですか。

【麗子】東北の問題、農村の貧困について論じ、書いた人で、全国的に知られていました。女性問題にはあんまり関心がなかったというような気がしますね。

【山本】『化外』の誌上に、菊地憲夫さんによる『満州に幼な子を残して』（折居ミツ）に対してのかなり厳しい批判が掲載されています（18号）『満州に幼な子を残して』―（満州開拓）を我々はどう歴史にくみこむか―。その後、2、3号

に渡って折居次郎さんとの論争が続くんですよ。この論争は、麗子さんも読んでいましたか。

【麗子】もちろん読んでいました。憲夫さんのことも良く知っています。家がすぐ近くで、私の所にも遊びに来たりしていましたから。

【山本】いま読んでみると、折居ミツさんのこの詩集についてまったく否定的な見方をしている、議論が噛み合っていない印象です。

この詩集は『通信・おなご』から生まれたものでもあり、麗子さんも解説を書いているところとで言うと、役回りとして麗子さんが出てきて菊地憲夫さんに反論してもおかしくないようにも思えます。

個人の名前を出して戦争体験を詩にしたり、文章にしていけば、そこに目を背けたくなるような現実や、ほんとうであれば人に語りたくないような事柄が出てきます。それを巡ってこれは良い、悪いというさまざまな論評が出てくる状況を、麗子さんはどのようにみていたのでしょうか。

【麗子】ミツさんはもちろん親しいし、憲夫さん

のこともよく知っているから： 雑誌で論じ合
っていたとしても、実際に私の家に遊びに来て顔
を合わせた時には、そういうことを話したりはし
ませんでしたね。日常付き合っている場所ではな
かなかそういう話にはなりませんよね。そこが知
り合い同士であることの欠陥かもしれませんね。
ここではいろいろ思っているけれど、お互い
に表には出さないでね。

【山本】 書く立場からすると、個人的な経験を書
いているわけですから、それを他人から否定され
たりすることは、すごく嫌なことでもあるだろう
し、怖いことでもありますよね。それをこういう
形で公にするのは、思い切った行為だなと思いま
す。

お互いが知り合い同士だったということはい
ま聞いたんですが、この文章だけを読むと、その
人間関係が壊れてしまうのではないかと思うく
らい厳しいことをお互いに書いていますよね。

【麗子】 そう思いますよね。でも、そうはならな
いんですね。

【山本】 詩を書くということとは、自ずとそういう

ものが出てきてしまうものではありますよね。ど
んな作品であれ、結局自分を書いているというこ
とで言えば、ストレートに自分の気持ちが出てく
ることもありますから、当然傷つくこともあると。
【麗子】 そうだと思いますね。(後略)

* 「詩人・斎藤彰吾と小原麗子の活動」展のパンフ

レット (大門正克・山本唯人両氏の論考、斎藤・
小原両氏の作品と解説を掲載) と記念座談会記録
冊子は日本現代詩歌文学館にて頒布中。

東北のおなごたちが読んだ森崎和江

柳原恵

一、はじめに―岩手・北上と森崎和江

森崎和江は植民地二世として生まれた故郷喪失者であり、「ふるさと」「日本」をもとめ全国各地を旅してきた。森崎は岩手県の北上を「ふるさと」であり、自分が「日本の女」になれた地として言及する。

(…) ずうっと回ってたどり着いた北上(岩手県北上市)が、
とってもおもしろかったんですね。(…) 『北上幻想』を書いた
ころには、やっと一人の日本の女になったような感じになっ
てましたね。(…) ああ、私のふるさととしての北上ができた
って、ね。

『北上幻想―いのちの母国をさがす旅』(二〇〇一)において、森崎和江は「戦後の私の旅がこだわりがちな北東北の岩手県」^二と記す。それは岩手が「外地と呼んだ当時の朝鮮の南部で、私が生まれた単婚家庭が子育ての基盤とした精神風土でもあった」^三からだという(同前同頁)。植民地で父親が森崎へ与えた教育方針に、西洋史学者煙山専太郎と妻八重子(関東大震災後、母子寮「愛の家」設立)^四ら、岩手生まれの知識人の影響があった^五。岩手は森崎にとって「幼少時代の故郷図の中に、福岡県に隣接する祖地めく日

本内地」として存在し、後年『からゆきさん』を心に抱く種子をまいてくれた地^四であった^四。

森崎はたびたび北上を訪れている。森崎と北上の直接のつながりは、詩が媒介したものだ。北上出身の詩人・相沢史郎は一九九八年に方言詩集『夷歌』で丸山豊記念現代詩賞を受賞したが、その選考委員のひとり森崎であった。授賞式後、相沢とともに北上を訪問した森崎は、当時市内ホテルの支配人であった工藤宣見と知り合う。相沢らはその後も森崎が北上を訪ねるたび、「悪ガキご一同さま」^五として北東北の案内役を務めた^六。

「女」は東北でも北九州でも方言で「おなご」と言い、森崎の作品のなかにもたびたび登場する。森崎はリブ(ウーマンリブ)と「同時代を生きながらリブと伴走したオリジナルな女性の思想家」^七と評価されるが、北上にも、このフェミニズムの波に先駆けて女の経験を思索の出発点とし、言葉を探してきたおなごたちがいる。詩人の小原麗子(一九三七-)と文筆家の石川純子(一九四〇-二〇〇六)である。本稿では、そうした北東北のおなごたちがどのように森崎和江を読み、彼女の思想に感応したのかについて、一九六〇年代から七〇年代のテキストを中心に見ていきたい。

二、九州と東北のおなごたちの出会（合）い

小原麗子と石川純子

小原麗子は岩手県和賀郡飯豊村（現 北上市飯豊）の農家に生まれ、たびたびもちかけられた縁談を拒否し、「家」に入ることなく「自活」を目指してきた先駆的フェミニニストである。青年時代は成田青年会（現 北上市飯豊）の女子リーダーとして地域の生活記録運動を牽引する。『微塵』（微塵の会、一九六一・一九六四）、『ペンペロコ』（北上詩の会、一九六五創刊）、北上読書連絡会機関誌『くらし』（一九六九年創刊）、『化外』（一九七三年創刊）などの地域文芸誌に携わりながら個人詩集を多数上梓する。一九七六年からは個人誌『通信・おなご』を発行、一九八五年には麗うらら舎しゃ（北上市和賀町）を設立し、女性たちの読書会「麗ら舎読書会」を始める^八。

石川純子は宮城県登米郡佐沼町（現 登米市）に生まれ、東北大学教育学部卒業後、岩手県水沢市（現奥州市）の私立高校に国語教師として赴任、以来岩手を拠点として活動する。妊娠・出産・育児経験に関する思索を重ねた個人誌『けものたちはふるさとをめざすー孕み・出産の記録』（一九七一）、『垂乳根の里だより』（一九七九）を発行、また、女性解放論や女性史研究の先駆者である高群逸枝の思想に

ついて『高群逸枝雑誌』に「高群逸枝論」（一九七二・七五）を連載、『両の乳房を目にしてー高群逸枝ノート』（一九八〇）にまとめた。麗ら舎読書会を拠点として東北の農婦たちの聞き書きも行い、『まつを媪ー百歳を生きる力』（二〇〇一）、『さつよ媪ーおらの一生、貧乏と辛抱』（二〇〇六）を上梓した。

小原と石川が出会ったのは、小原が三六歳、石川が二八歳の頃であった。当時、男子生徒が「坊主頭」を拒否して髪を伸ばす「長髪問題」が教育界で問題となっていた。石川は職場の同僚を通じて、「詩を書いている、ちょっと変わった人」である小原が、「長髪問題」は「人権」や「自由」の問題であると言ったことを知る。「自分がどう生きるかについてか、女としてぶつかっている問題とか、そうゆのを語る人がうんつとほしかった」石川は、その小原の言葉に「ピンツと来た」。「その人にこそ会いたい」と思った石川は、小原に電話をかけ、北上駅で初対面した。

当時北上の農協に勤務していた小原は生家を出て独立、市街地にアパートを借りて一人暮らしをしていた。女性にとっては「たかが読書であっても」、「闘いとらねばならぬ」^九らないものであった。オリヅランを育てるアパート二階の一室は、小原にとって闘いとった「自分だけの部屋」であった。

女の経験を思想化しようとする森崎和江は、男仕立ての思想ばかりが蔓延するなかで「女のことば」を探した女性たちに大きな影響を与えた人物であると評される^{一〇}。が北東北のおなごたちもその例外ではない。家父長制の残滓が色濃い農村部の「家」から抜け出た、女の一人暮らし。読書や詩作ができる「自分だけの部屋」。その部屋でおなごたちは森崎和江の『闘いとエロス』を読んだ。

森崎和江たちとの巡り合わせ

小原麗子が森崎和江を知ったのは、当時北上市図書館に勤務していた齋藤彰吾を通じてであった。

彰吾さんは、九州で発行されていた、同人誌を見せてくれました。それが、『サークル村』（一九五八年〈昭和三三〉）年刊刊、九州の労働運動交流機関誌）であったか、『無名通信』（一九五九年〈昭和三四〉）年に、『サークル村』に属していた、女性たちにより発行された同人誌）であったかは、定かではありませんが、それによってわたしは森崎和江を知ったのです。森崎和江は、「性」と「産」を語ろうとして、言葉がないと言います。それはどういふことか。分からないのに引かれます。

齋藤彰吾は戦後サークル運動の中で（おそらく国民文化会議の集会において）谷川雁らと知り合った^{一一}。齋藤のもとへ機関誌『サークル村』、そして森崎和江らの『無名通

信』も送られてくるようになり、小原麗子へ手渡されたようだ。『サークル村』二巻二号 および同一号（一九五九）の「消息」欄に、齋藤の便りが寄せられていることから当時の北上と筑豊の交流の様子がうかがえる。

石川純子は、小原とは別のルートで森崎和江の思想に出合っていた。石川は一九七〇年の第一子出産を控えた時期に『第三の性』（一九六五）を読み、また『非所有の所有』（一九六三）のコピーを友人から手渡され、大きな影響を受けていた（四章で詳述）。

また、小原らは森崎和江らとサークル村で活動した河野信子、石牟礼道子とも交流があった。小原は河野信子の個人誌として再出発した『無名通信』四二号（一九七七）にエッセイ「姉の墓に向かう」を寄稿する。河野信子は、一条ふみ^{一二}と共に小原を論じた「一条ふみと小原麗子」（一九八〇）^{一四}を書いている。また、河野信子は『両の乳房を目にして』に「石川純子さんの孕みの思想は、本書の高群逸枝との共振領域によって、いっそうの深化をとげています。女を呪縛する、あまたの幻想をしりぞけ、自然性の認識を得られた氏の論述を、貴重なものといえます。」という帯文を寄せている。この頃、小原と石川は九州を訪問し、石牟礼道子と面会した。「河野信子さんも『なぜ寄ってかない

「五氣後してしま、会うことはなかったという。」

次章からはこのようなつながりのあった岩手のおなごたちが森崎和江をどのように読んだのか、具体的に見ていこう。

三、北上と筑豊の共鳴

宙返りの言語に向けられる毒針

まず取り上げるのが、一九七四年に書かれた小原麗子のエッセイ「毒針の言語は体内をめぐる」^{一六}である。掲載誌の『俗天』は、「現代東北の民衆思想誌」^{一七}を銘打ち、「自分の立っている場を中心にしてものを考える」「土着の思想」を提示することを目指し、詩人・伊藤盛信らが北上で創刊した『村のインテリ』を自覚した者の雑誌^{一八}である。以下では、「毒針の言語は体内をめぐる」の前半部分を、少々長くなるが引用してみよう。

話すべき者が、逆立ちや宙返りの言語を弄する前に、女たちは、笑い出す前の笑いなどではない笑いで、座していた。

(…)

「失語症になるよナ。」と、なにを喋っていいかとまごつき、なにも喋れなくなるのだと、彼ら（斎藤彰吾や伊藤盛信）は言っていた。

そう、彼らはためされるだろう。その無表情ともとれる表情に浮かべる笑いが居並ぶ前で、「おれたちは崩壊した（ムラ）から思想的出発をする。」（『化外』創刊号）と宣言する彼らは、ためされるだろう。

「崩壊したムラから思想的出発をするのだすども、あなごト「あんなこと」言うてで、おなごのことだげるのだから……ホニ……。」と居並ぶ女たちは、垢取りのスカーフの衿元を合わせながら、まず、こういう問いを持つだろう。(…)

それならば、前近代 近代と言ったことではなく、猥談なるものを弄すれば、この女たちの門扉を開くことが出来るか……というト、それも早とちりなのであった。

炭鉱の女たちが、サークル交流誌のオルグに来た者に、どのように対応したか。森崎和江著『闘いとエロス』の「第一章 眠られぬ納屋」は、書き出しとしても、まことに象徴的である。

炭鉱の女たちは、サークル交流のオルグに来た女性、契子を前にして、「せんせ、サークルちゃほんもの人間は作るこつじやろが。不感症はかたわじやろもん、せんせ、あんたの考えはこの女にいうちゃんない。」と声をかける。

あのこと？あのことなら知っているさ、俺は女房持ちで何十年。その道じゃベテランなのだと言つては、これまた困るのである。

「おおい、誰てん聞いちよくれえ、うちの土助平がんば女郎のごと思うちよるばい！」「うちや、カツときたねえ、うちや女郎じゃないばい」という痛烈なパンチが返ってくるだろうからである。一九

当時、北上では東北・岩手という立ち位置から思想を作り出そうとする詩誌や地域思想誌が誕生していた。引用分中で言及されている『化外』とは、伊藤盛信は斎藤彰吾、相沢史郎らが一九七三年に「エゾ・エミシ論」を掲げ立ち上げた雑誌である。「化外」とは中央の政治、文化圏からふるい落とされた地帯、収奪の対象としてしか存在しない辺俗を意味する^{二〇}。『化外』は高度経済成長の矛盾により「崩壊した(ヘムラ)から思想的出発をする」とし、「いまのおれたちの思想的行動は、自立した土俗、土着しそうを探りあてて活性化していくことであり、しかも天皇制ナショナリズムに拮抗する土着的で、共同の(化外)思想と感情をつくりなおしていくこと」^{二一}を目指した。小原もまた『化外』の同人であったが、小原は『闘いとエロス』の書き出し部分を引きながら、「村のインテリ」たる男たちの言葉で「逆立ちや宙返りの言語」と評し、男たちの詩/史的闘争が、同じ「化外(周縁・辺境)」の地に住む女たちの生活世界と乖離していることを指摘する。「外部の変革の論理

で女を抱こうとしている」^{二二}地域知識人男性へ向けられた鋭い「毒針」である。

おなごにとつての闘争とは

次のパートでは、小原の周辺のある職場で、妻子ある男性(課長補佐)と女性(C子)が駆け落ちしたという出来事が扱われる。

(…) 恋人の課長補佐の他にも、まだ異性とのつきあいがあつたということで、C子がそばを通ると、「共同……が来た来た。」などと(…)職員は陰口を言っていたというのである。

汚物処理を連想させるものと性の結合は、同じ次元なのか……? 共同にならなら、自家製にならというべきか……などと、悪態をつくつもりはない。(…)

共同になにと言つて、女一般をも(いう自分をも)おとしめるような言い方をする男たちは、C子の相手が同性であることに気づいていない。己れひとりだけが、それを言わしめる土壌から自由でいられるはずもないことに気づいていない。

それにしても、男に対しての共同になにと言う言葉は聞いたことがない。男が多数の女を相手にしようという時には、一種の優越感、または甲斐性として語られる。(…)

共同になには、C子が女性であるがために語られた言辞なのだろう。こうした精神構造に、いささかの疑義もはさまらずに、労働組合は、「団結」などと言つては、腕を高々とかざす。わ

たしは腕を上げて、心の中で赤面する。赤面ではすまされない
想いは、いつもいつも胸の内奥に埋めてきた。埋めたものは、
発芽せずにはおかぬだろう。

『闘いとエロス』第七章「凍みる紋章」は、組織のなかで強
姦された少女についての痛苦が刻まれる。強姦された少女は契
子の内に棲み付き、契子は相手とあい抱くことができなくなる。
「あの氷河の少女は男を許さぬ」のだ。

つまり少女が強姦をされたところで、わたしら（夫婦）があ
い抱くことになんら関係なしとはしない。「千の万の死臭と歩
く」その共有の深さに打たれる。二三

「共同（便所）」とは多数の異性と性交渉を持つ女性に対
する蔑称であり、C子は女性であるがゆえにこのような言
葉で貶められた。小原の批判する「こうした精神構造」と
は、男性の性的放埒に寛容で女性には貞節を求める性の二
重基準である。小原は女性の性を蔑め、同時に男性の性も
汚物処理の次元に貶める暴力的で貧しい「精神構造」を批
判する。この主張からはリブにおける田中美津の「便所か
らの解放」（二九七〇）も想起されよう^{二四}。

さらに小原は『闘いのエロス』において、運動内部で発
生した強姦殺人事件をきっかけに、主人公「契子」がパー
トナーの「室井」と性交渉を持てなくなったことに触れ、
「少女が強姦をされたところで、わたしら（夫婦）があ

抱くことになんら関係なしとはしない」と記す。「なんら関
係なし」と切り離せないのは、それがフェミニサイド（ジェ
ンダー）に基づく暴力である、女性を標的にした殺人）であ
り、社会的文化的に作られてきたジェンダーやセクシャリ
ティの問題であることを看破していたからであろう。第二
波フェミニズムが提起したように「個人的なことは政治的
なこと」であり、「女であるがゆえに」彼女が被った暴力
は「女である私」に起きたことかもしれない。強姦により
殺害された少女は「わたしなの」^{二五}である。

陰口と強姦殺人という、全く次元が異なるように見える
二つの出来事を、小原は女性を人間としてではなく男性に
とつての性のはけ口としてしかとらえない「精神構造」の
地平に併置し、批評する。「こうした精神構造」への批評は、
「女に関することは闘争と別と思つたらう（…）女の抱き
かたを知らん労働者は、本質に於て労働者をしめ殺しよ
る。」^{二六}と言う「知子」（『非所有の所有』）の言葉とも共鳴
する。詩人の「想い」はやがて、女としての経験を土壌に
育つ「毒針の言語」として「発芽」する。

さらに、女が男と同じ闘争の場につくまでの障壁につい
ての描写も興味深い。

炭鉱夫の女房は、おやじに（夫に）「なしサークル好かんと言うてみ、ち、言ったつたい。」「うちが契子さんの話しば聞いて帰ったら、目ば三角にしちよつたよ。」という。

わたしの知っている、八重子さんなども、そのことが容易ならざる障害であるという。八重子さんは、体力、弁舌、まことに闊達、人をたのしませ、恐いものなしと、わたしなどには見えるのだが、ただ一つ、夫が集まりに出たり、その集まりでリーダーシップを発揮することなど、ことごとく嫌うというのである。（…）女とは人前にしゃしゃり出るものではないと、固く信じているのかもしれない。女房に人前で、リーダーシップなど発揮されては（…）男の沽券にかかわるとでも、思っているのかもしれない。二七

ここでは北九州の「炭坑夫の女房」と北上の「八重子さん」の置かれた状況が重ね合わされて描写されている。農村の女たちにとっても炭坑の女たちにとっても、「集まりに出」ること自体が闘争そのものであった。

なお、「毒針の言語は体内をめぐる」で名指しされる伊藤盛信、斎藤彰吾はこの文章が掲載された『俗天』の創立メンバーであり、のちに北上に遊ぶ森崎を案内することになる「悪ガキご一同さま」でもある。「悪ガキご一同さま」は、おなごの視点から放たれる小原の批判―毒針―を受け止めることができる男たちでもあった。

四、孕みの思想と産の思想

ゆらぐ（わたし）という主体

次に取り上げるのは石川純子の文章である。石川は職業軍人であった父を戦争で失う。戦後、行商で一家を支える母を目にしながら自立心を逞しくして育った。大学卒業後、教師として着任した高校で出会った夫と職場結婚する。翌年、長引く腹痛のため入院して発覚した妊娠は、石川にとっては「青天のヘキレキ」二八であった。学生運動の洗礼を経て近代的個人の確立をめざしていた当時の石川にとって「主要なことは、自分の仕事を通して、いかに生きるかという課題を解決することだけで、全く“子供”云々については思いも及ばぬ課題」であった二九。しかしながら石川は、「孕み」をきっかけに、自身の身体経験と内面の揺れ動きを克明に記録し、妊娠・出産を思索する「孕みの思想」に取り組むようになる。女性史家もろさわようこの編んだ『ドキュメント女の百年四 女のからだ』（一九七九）には、石川純子のエッセイ「垂乳根の里へ」（『女・エロス』五号、一九七五より）と森崎和江の「おキミさん」（『からゆきさん』一九六七より）が収録されていることから、森崎と石川は同時代的に女性の身体経験やセクシュアリティを思索した人物であると評価できよう。

石川は出産を控え入院した病室で、夫や母がベッドに飾り付ける花を見て、「私の葬壇が着々と出来上がり、喪に服しているような雰囲気」を感じ取り、「産んだ女の方々私に引導を渡してください」あなた方の内的世界をどうかことばであかして下さい。素手でいくのにはあまりにも酷な『彼岸』です』^{三〇}と記す。それは「近代人としての自我の確立を」^{三一}求めてきた自分への引導であり、石川にとって「孕み」と出産は、青年期を通じ戦後民主主義の潮流のなかで構築してきた自我を一度葬る過程として位置付けられた。

一九七〇年二月、石川は難産の末男児を出産する。孕みの思想を考えるにあたって、石川がたびたび言及するのが高群逸枝と森崎和江である。

(…) 私は産むまぎわに「第三の性」を書いた森崎和江と、「女性の歴史」を書いた高群逸枝に引導を渡してもらえた。(…) しかし、私はそれをことばにしたいと思う。そうでなければ、何が終わったのかわかりようがないから。今はまだ分からぬ。見つめてゆくだけだ。^{三三}

石川は出産直後、「自分がどのようになったのかさっぱり解釈できないで」いたが、「内面のもやもやをいづれことばで照射」する手がかりとして、「出産後妙に心に引っかかる」、「母が語った言葉」^{三三}について思考する。そのひとつ

が「もぞい」という東北の方言である。「もぞい」とは可哀想だ、不憫だというニュアンスを持ち、九州・沖縄にも同様の言葉が存在している。森崎の作品でも、たとえば幼子を亡くした親へ村の人びとがかかる「ほんに、ええらしか(愛らしい)ジョン(男の子)じゃったばってんのう。むぞか(かわいそう)ったのう。」^{三四}という慰めに用いられている。石川いわく、「哀憐を表すが、かわいそうだ、せつない」といい、ということばで代用できない質を孕むことば」であり、一九七〇年代当時においても石川の世代にとつては既に「死語」であった。しかし、石川が産後初めて授乳する際、うまく乳が飲めず泣く赤子を抱いて自分も半泣きになりながら「もぞいもぞい、という今まで使ったことのない言葉で胸がいつぱいになった」。その理由について石川は、泣く子に重点があれば「かわいそう」、自分に重点があれば「切ない」という言葉が浮かぶはずであるが、これらの手もちの言葉は適当でなかったためだと分析する。つまり、「自分と切り離せない子供なるもの」を見て「母」になった自分の内面の構造に見合った言葉として無意識的に選択されたのが、「主客同一体の構造」をもち、「祖母たちの代」まで伝わっていた「もぞい」という方言だったというのである。^{三五}

続いて、赤子に対して発話した一人称をめぐる思索をみてみよう。石川は「さあ、そんなミルクなんて飲まないで、ママのおっぱい飲んでよ。」^{三六}という「何気ない」一言から、「どうして私はへわたしのおっぱい飲んで」と言わないのだろうか？」^{三七}と自問自答する。

私がこどもを孕み、産むことで肉体の構造はすっかりかわりました。精神構造も当然かわったはずです。

つまり、形而上界の千葉純子（へわたし）という（個我）も又孕んだのです。出産を契機に、千葉純子の個我は仮に名づければ（孕んだ個我）なる構造をもつものになったのです。^{三八}

石川はふとこぼれた一人称を手がかりに、子を持つことで変化した自我を「孕んだ個我」として捉える。「他者と峻別する主体を表現することば」は「わたし」以外にないため、「ママ」という言葉が「女が今までの主体（個我）」とは異質の主体（孕んだ個我）を表現するため」の一人称として「無意識のうちに出てきた」のである^{三九}。ここで想起されるのは、森崎がさまざまな作品でくりかえし振り返る、妊娠中に「わたし」という一人称が使えなくなった経験である。

「わたし」ということばの概念や思考用語にこめられている人間の生息が、妊婦の私とひどくかけ離れているのを実感して、はじめて私は女たちの孤独を知ったのです。それは百年、二

百年の孤独ではありませんでした。また私の死のちにも続くものと思われました。

いえ、ことばが不足しているのです。概念が浅すぎるのです^{四〇}。

森崎が妊娠によって感じた「近代精神としての「わたし」の限界（…）あるいはその発想がはらんでいる一代完結性の持つ、思考の未熟さ（…）。要するに近代的自我の持つ認識の浅さ」^{四一}を、石川は授乳を通じて感じ取った。他者を孕み、産み、体内から分泌する母乳を与え育てる主体にとって、首尾一貫し揺らぎのない堅牢な「わたし」という概念は適当ではないのである。

石川にとって、この（孕んだ個我）なる者の内実に迫ってゆく」手段の一つが東北の「農婦」への聞き書きであった。第一子出産後、岩手県胆沢町（現・奥州市）の農婦・伊藤まつをの著書『石ころのはるかな道——みちのくに生きる』（一九七〇）に出合う。以下に引用するのは石川がまつをへ宛てた手紙である。

それ（孕んだ個我）は産んだ後私の中に新しく生まれたものではなく、もともと女性の中に本源的に内在するものではないのか・・・？私はそれに照射をあててその内実に迫りたいと思いました。しかし（…）男の所有となってきた女の身体、意識の中にどこにその原型が認められるのか？もはやせいぜい

あの分娩のきわみにその痕跡として直覚できるぐらいではないのか。私はかつて読んだ高群逸枝の本と、偶然手にした森崎和江の『まっくら―女坑夫からの聞き書き』を握って、そんな自問を繰り返していました。(…)そんな時に出会ったのが、(…)『石ころのはるかな道―みちのくに生きる』だったのです。私にはそれが、まるで幾時代もの女を埋めたあの広がる泥田の中で唯一、女の原型をいくらかでも露呈させた小さな塚のように見えました。^{四二}

石川は、高群逸枝の『火の国の女の日記』と森崎和江の『まっくら』を持って「唐突にしかも強引に」まつを宅を訪問する。まつをは「たった一週間で、あんなに厚い『火の国の女の日記』と『まっくら』とを読み通し、人生最良の良書とまで云つた^{四三}。石川がまつを見た「小さな塚」、それは森崎が言う「文字に縁なく、そんなものを無視して暮らす人びとが新しい泉に思えた」^{四四} 経験と相通じるものであろう。

石川は女性史家高群逸枝の「母性我」と並べて、森崎和江の「極小共同体」(『非所有の所有』)という言葉を「女の構造を説明する視点」^{四五}と捉え、まつをへ向けて言葉をつむぐ。

(…)私は出産後、自分の精神空間の広がりのようなものとまどったわけですが、森崎和江のことを借りれば、女の精

神界は自分自身が「極小共同体」なのですね。(…)おばあさん「まつを」と話していると女の精神界(極小共同体)なるものが大げさにいえば透けてみえるような気がします。(…)それは多分まだ女の個我がそれ程分裂させられない農村共同体の中だから可能だろうとは想像しています。逆に言えば、女の内部(極小共同体)にみあった農村共同体がまだ生きていた時代だったからとも云えましょう。^{四六}

〈極小共同体〉という概念へ引きつけて考えるならば、石川の言う「孕んだ個我」は森崎によつて炭坑の女たちが有していると描写されるような共同性―「一事が万事、人と我と区別せんと。共同生活ですけん、ひとのことがじぶんのことと同じ苦痛になりますたい」^{四七}というときの共有性―を一人のうちに有したものである。加納実紀代が『まっくら』について論じた言葉を借りれば、石川は「ここにある〈個〉を超える世界に、「女の〈私〉」の手がかりをみいだ」^{四八}したのである。自他を峻別する近代的自我、あるいは「母性」といった近代的なジェンダー概念により整形された女性主体とは異なる、自他の共同性をはらんだ「〈極小共同体〉」たる「孕んだ個我」。それは「秩序体制の外に置」かれた、「ひとつの肉体にふたつの靈魂というが如き妊婦の感性と発想」^{四九}を含んだ豊かさをもつ。

産と孕みの思想の広がり

森崎の「産の思想」をめぐることは、「異性愛主義や性愛主義、出産経験の中心化があり、「女」を一定程度画一化して古めかしい男女二元論的な構図に回帰する危険」^{五〇}や「本質主義的なジェンダー理解の限界」^{五一}が指摘されてきた。「女」の本質や本源を措定し、そこに価値を見出そうとする石川の「孕みの思想」も、同様の批判を免れ得ないであろう。一方で、石川の「孕みの思想」とは「自然」の領域として言語化されずにきた経験に新たな概念と言葉を与えようとする思想的営為であり、その担い手を産んだ女だけに限定するものではない。

ただ、高群逸枝にしても森崎和江にしてもこれらのことばを女が子どもを産むとか、産まないとかには関係なく〈女〉そのものの内的世界をあらわすものとしていられるのです。あるいは、私の〈孕んだ自我〉なるものも産む産まずにかかわらず女一般に普遍化できうるものなかもしれません。^{五二}

孕みや産の思想を考えることは、思想化されえなかった現象をめぐる新しい言葉を生むという営為であり、産む／産まないという線引きで、再び（古めかしい）分断を持ち込むことではない。森崎和江との対談の中で、上野千鶴子はこの世にまだない産の思想を作ることに参入することに對し、「でも、現に私は産まない女になって……。」と言い

淀むが、森崎は「そんなの関係ないでしょう！私、そういうこと言ってるのと違いますもの、ね。そう言ってしまえば、男はみんな同じこと言って逃げますよ。（…）産まんかったら対の思想を感じなくていいって言ったら、私怒っちゃう。泣く。そういうことと違う。」と言葉をつなぐ^{五三}。

小原麗子もまた「産まない女」である。詩人としての道を歩む小原には、「爪に火を点して、子を育てたおふくろたちと同じ道を歩まずして、「農村」のおんなの詩が書けるかという、叱責の一矢が飛んで」^{五四}きた。小原は石川純子とともに、託児所・柳下村塾（福岡県柳川市）を訪問する。柳下村塾は「託児所」を「母が三歳の子を残してこの世を去ろうとするとき、その子を託して安心して死んでいける場所」^{五五}と規定する。小原はエッセイ「子どもはどのようなしてやってくるか」（『俗天』三号一九七四年）のなかで、『闘いとエロス』において「ぼくらの子が欲しい」と言つた「室井」に對し、「あたしたち三人生んでいるのよ。」と「契子」が返す場面を引き、他者を私有する「わが子」という意識を「越えようとする思想」をそこに読む。柳下村塾の子どもたちは母親を「ママ」、保育にあたる大人たちを「母ちゃん」「父ちゃん」と呼びながら、「複数の母」に見守られて育つ。小原は「複数の母」と子どものいのちを

まなざし、親子の所有・被所有の関係を越えた親密圏のなかに子産み・子育てを位置付ける。

石川や森崎が孕みを通じてつかんだ、複数性を有した言語化し難い主体や親子の関係性は、思想として「普遍化できうる」可能性を持つものであり、その思想化の担い手は女（産んだ女）に閉じるものではない。本質主義や（異）性愛主義、出産経験の特権化を回避しながら、孕み・産の思想を読む可能性は開かれている。

五、おわりに――「くらい場所」から思考するおなごたち

高度経済成長期を経て農村も炭坑地帯と同じように大きな変動に直面した。小原はエッセイ「^{ひびと}囲炉裏について」（一九七九）のなかで、日本の農業は「家に縛られ」た「農家の嫁」という「女奴隷」の「過重なる労働」のうえに成り立っているという学者らの記述を引き、「女奴隷という言葉にはなじめない」ものの、自身の母もその典型として生きてきたと述べる。その上で戦後実現した農業の機械化が、農作業中の「おなごだち」の「高笑いも、なごみも、赤子の声」も消えてしまったことに「物足りなさ」を覚えること記す。

おなごだちを、「過重なる労働」から解放すべく購入した田植え機械たちは、その稼働力において、人の十倍の力を発揮した。が、「過重なる労働」に付随する、高笑いも、なごみも、赤子の声も、共に消し去った。それは当然のことであつたらう。だが、予期しないことだった。はぐらかされたようで、なにか物足りない^{五六}。

農業機械の導入は確かに農作業の負担を軽減した。一方で機械化される以前の農作業の中には、労働を通じて人と人とを結びつける豊かさが確かに存在した。それは「女奴隷」という評価の中では見えなくなってしまう、森崎のいう「やわらかなエロス」^{五七}であろう。筑豊では「女性保護」の立場から女たちは危険な坑内労働が禁止され、エネルギー革命によりヤマが次々と閉山される。炭坑労働者が従事した非人間的な労働環境はなくなるべきである一方、『奈落の神々』で森崎が描く、太陽を染めた山襦袢を着込んで地下に降りる人々のみが有した精神性やエロスも姿を消した。

小原は一条ふみに寄せたエッセイ「うわさ話をよみがえらせる――一条ふみの思想・東北」（一九七八）において、以下のように記している。

「東北はくらい」というイメージがある。それがマイナスに作用していると、しばしば語られて久しい。（…）「くらい場

所」からは、「あかるい場所」がよく見えるのである。(…) 齒
ぎしりして悔しがること、堪え忍ぶことの連続であったとする
「北辺のおなごたち」の位置から見えてくるものこそ、手がか
りがあるのではないか五八。

おりづるらんが伸ばしたつるの先に子株をつけ、他所へ
と根付くように、言葉は本という媒体を通じて九州から東
北へと手渡されていた。九州と東北。ともにまつろわぬ民
の住む辺境、化外の地とされた歴史を持つ。近代化、産業
化、都市化の矛盾が析出した「くらしい場所」から、おなご
たちは日本の近代を思索した。

初出：『現代思想』二〇二二年十一月臨時増刊号総特集Ⅱ森崎和江

一 森崎和江・中島岳志『日本断層論―社会の矛盾を生き
るために』NHK出版、二〇一一年、二二八―二二九頁

二 森崎和江『北上幻想』岩波書店、二〇〇一年、一一四
頁

三 森崎和江・鶴見俊輔「自分の立つ場はあるか」鶴見俊
輔『国境とは何だろうか―鶴見俊輔座談』晶文社、一九九
六年

四 『北上幻想』一四六頁。なお、森崎の「後世の私たち
は(…)文字化された資料によって日本が西南から北東北
へと夜明けを迎えたと思う」(同書二三頁)という記述には、
「悪ガキご一同さま」の北上の詩人らが批判し乗り越えよ

うとした、文明的夜明けを待つ昏い場所としての東北イメ
ージを見逃すことはできない。

五 『北上幻想』一五九頁

六 筆者による工藤宣見への取材(二〇二二)より。

七 上野千鶴子「日本のリブ―その思想と背景」天野正子
他編『新編日本のフェミニズム―リブとフェミニズム』岩
波書店、二〇〇九年、一八頁

八 麗ら舎読書会の活動については拙著『化外』のフェミ
ニズム(ドメス出版、二〇一八年)を参照されたい。また、
森崎とのつながりを付け加えると、麗ら舎読書会は戦没農
民兵士高橋千三とその母セキの法要・千三忌を営んでおり、
秋田出身の小説家・簾内敬司(一九五―二〇一六)は高橋千
三を主人公とした『千三忌』(岩波書店、二〇〇五)を著し
た。簾内は森崎とも親交があり、往復書簡形式の共著『原
生林に風がふく』(岩波書店、一九九六)のほか、『遙かな
る祭り』(朝日新聞社、一九九七)の巻末エッセイ、『奈落の
神々』(平凡社、一九九六)の解説を書いている。

九 小原麗子「闘いとらねばならず!たかが読書といつて
も」『全国農業新聞』一九八四年一月二三日

一〇 前掲 上野(二〇〇九)、一八一―一九頁

一一 小原麗子「あとがき」北上詩の会『ペン・ペロ・コ』
一六三号、二〇一三年、八五頁。補足原文

一二 筆者による斉藤彰吾への取材(二〇二二)より。

一三 一条ふみ(一九二五―二〇一一)岩手県一戸町生まれ。
著作に『永遠の農婦たち』(未來社、一九七八)、『淡き綿飴
のために―戦時下北方農民層の記録』(ドメス出版、一九七
六)など多数。岩手県北部の一戸町で農村女性らの聞き取
りを続け、農民生活記録文集『ともしび』、『むぎ』を刊行。

一四 河野信子『日本の女戦後編』どのように女たちは生きていたのか』原生林、一九八〇年、

一五 筆者による小原麗子への取材(二〇〇七年)より。

一六 『俗天』一号、一九七四年。小原麗子『稲の屍—小原麗子散文集』境涯準備社、一九八〇年再録。

一七 『俗天』一号表紙より。

一八 伊藤盛信「創刊挨拶」『俗天』一号

一九 小原麗子「毒針の言語は体内をめぐる」『稲の屍』三四三頁より。「」内補足は引用者による。なお、本稿で引用する文章の中には、今日の人権感覚に照らして不適切な語句が用いられる場合があるが、本稿においては差別的意図ではなく、あくまでも歴史的用語として、そのまま引用する。

二〇 季刊『化外』編集同人『化外』一号、一九七四年、二二頁

二一 同前同頁

二二 森崎和江『非所有の所有—性と階級覚え書』月曜社、二〇二二年、二四頁

二三 小原麗子「毒針の言語は体内をめぐる」『稲の屍』三四四—三四五頁より。補足原文。

二四 田中は女を「便所」に押し込めるシステムは、男の性を「汚物」に貶め、男自身を自らの性から疎外するとし、女の性を便所から解放することは、すなわち男の性を排泄としての性から解放することであると主張した。

二五 森崎和江『闘いとエロス』月曜社、二〇二二年、一八五頁

二六 森崎和江『非所有の所有』一六六頁

二七 小原麗子「毒針の言語は体内をめぐる」『稲の屍』三

四五頁より。

二八 石川純子『けものたちはふるさとをめざす』一九七一年、一三頁。強調原文。

二九 同前同頁。なお、石川は「孕み」を思想するが、「孕み」をもたらず性行為については言及や思想化を避けている。

三〇 同前四八頁

三一 同前八二頁

三二 同前六二頁

三四 森崎和江『大人の童話・死の話』弘文堂、一九八九年、二二頁。補足原文。

三五 石川純子『けものたちはふるさとをめざす』、六二—六七頁

三六 同前九二頁。強調原文。

三七 同前同頁

三八 同前九三頁。千葉は石川の結婚後の姓。

三九 同前同頁

四〇 森崎和江「産むこと」森崎和江編『産』作品社、一九八九年、二二—八頁

四一 森崎和江『匪賊の笛』葦書房、一九七四年、一七一—一七二頁

四二 石川純子『けものたちはふるさとをめざす』、一六六頁。補足引用者。

四三 同前同頁

四四 森崎和江「聞き書きの記憶の中を流れるもの」『思想の科学』一九九二年二月号『まっくら』岩波文庫版二〇二一(再録)

四五 石川純子『けものたちはふるさとをめざす』、九三頁

四六 同前一六六一一六七頁。「」内補足引用者

四七 森崎和江『まっくら―女坑夫からの聞き書き』岩波書店、二〇二二年、二三九頁

四八 加納実紀代「交錯する性・階級・民族―森崎和江の〈私〉さがし」加納実紀代編『リブという〈革命〉―近代の闇をひらく』インパクト出版会、二〇〇三年、二五六頁

四九 森崎和江『海路残照』朝日新聞、一九八一年、一七四頁

五〇 西亮太「輻輳的な『わたし』から―初期詩作品と批評のことばをつなぐために」『詩と思想』八月号二〇二一年、四六頁

五一 大畑凜「解題 困難な書」森崎和江『闘いとエロス』、三九六頁

五二 石川純子『けものたちはふるさとをめざす』九三頁

五三 上野千鶴子・森崎和江「対談 見はてぬ夢―対幻想をめぐって」『ニュー・フェミニスト・レビュー』、一号、一九九〇年、四八頁

五四 小原麗子「子どもはどのようなようにしてやってくるか」『俗天』三号一九七四年（『稲の屍』再録）

五五 柳下村塾経営委員会編『伝習館・複数の母たち―柳下

村塾 女と地域』三一書房、一九七四年

五六 小原麗子『稲の屍』一九八二年、三九三頁

五七 『非所有の所有』二四頁

五八 小原麗子「うわさ話をよみがえらせる―一条ふみの思想・東北」『河北新報』一九七八年四月一六日（『稲の屍』、二五四―二五六頁）

姫ひまわり

高橋 つか子

空に向かい

ピラミッド型に咲いていく

小ぶりの黄色い花

職場の昼休み

鉢花を抱えたおばさん

「今、職場をまわっているのよ」と

事務所の玄関前に並べる

いっとき 小さなフラワーショップに

みんな 好みの花を選ぶ

わたしは鉢いっぱい黄色

姫ひまわりにした

一九六〇年代

女性は嫁ぐと退職した

それが当たり前だった が

わたしは姫ひまわりに出合えた

庭に根付いた姫ひまわり

株は広がり

九月の終わりに咲きだした

猛暑のなか

庭を彩ってくれた花たち

すっかり色褪せた

おつかれさま と

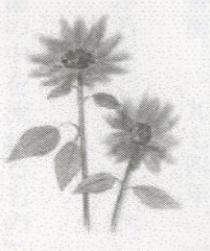
労いを添えるようにかがやく

姫ひまわり

白い雲が

ふんわりと

ほほ笑んでいる



坂の上から

渡邊満子

結婚した頃

県南の小さな町に住んでいた

共働きだった

長男が生まれ

実家の母を呼んだ

町はずれにある旧家の

お屋敷の中に建っている

アパートを借りていた

昔 落人が立ち寄り水を飲んだと言う

由緒ある池があった

夏は蝉時雨が鳴いた

母は長男を抱きを抱き

坂の上でバイバイをする

私は手を振りながら坂を下り

また大きく手を振って出勤した

帰宅する頃

胸がちぎれそうになり

おっぱいがブラウスを通してしみ出ていた

急いで玄関の戸を開けると母は言った

「うんと待ってだよ

早く飲ませてやって」

鞆をほうり投げ胸を開けると

ごくごくんと喉を鳴らし

いきおいよく吸う

たちまち胸はぺしゃんこになった

「かたつども音するぞ

帰って来たがと思つて

何回も外の方を見るの

もっと早くこれないのっか」

六か月間面倒を見て

北上の家に帰った

母の

小さな後ろ姿

佐藤恵美さんへ

高橋　つか子

麗ら舎読書会ではいつも笑顔で「皆さんお元気でしたか」と、声をかけてくれる。私は恵美さんの一声で心が温かくなりました。集まったおなごたちは、新しい本の話題、日常の疑問、台所でのささやかな思いなど、会は和気あいあいでしたね。

遡った話になりますが、後藤野開拓地で暮らしていた、故折居次郎さん、故ミツ子さんご夫婦と、故小原昭さんは満州から引き揚げてきて、当時の生活を麗ら舎で麗子さんの指導を受けながら執筆をしていましたね。私の姑も満州で折居さんたちと一緒に開拓団として働いていたそ

うです。幼い子四人を連れて引き揚げてきた姑は、「船の中での長い暮らしがあり、死を覚悟したったあ、日本の土を踏んだ時は夢のようだったなあ」と語り、私は手に汗を握って聞いていました。恵美さんも満州で暮らしたと話していましたね。引き揚げてくる時、「私は長女（六歳）でね、弟や妹の世話をしながら、大きな荷物を背負った母に手伝ったのよ」と。

姑の歩いてきた道と、子どもころの恵美さんが歩いた道を重ね合わせて、心に残っていました。

恵美さん、事務局のお仕事を長く受けもっていただき、本当にご苦労さまでした。例会案内の葉書をファイルから出してみました。季節ごとの花の写真に俳句を詠み、添え書きがあり、みなさんと会うのが楽しみでした。

三年前の千三忌墓参のとき、私は家の庭に咲いている花を供え、残った花を恵美さんが「吾亦紅の花、好きなのよ」と、言ってくれたので、

差し上げました。数日後、手紙が届きました。「つか子さん、千三忌は楽しかったですね。あなたが持参した吾亦紅、ホトトギス、浜菊をいただきました。居間に飾ってながめています。私も大好きなんです、庭になかなか定着しないので、季節になると欲しくなります」。

以下省略

青い空に向かい、ぽつんぽつんと咲く紅茶色の花、私は嬉しくなつて吾亦紅の株を分けてあげたいと思っていました。翌年の八月のはじめ、哲子さんが「恵美さんの家に届ける物があゝ」と言つて寄つてくれたので、吾亦紅の根も一緒にお願ひしました。真夏日が続いたので、根が付くか心配でしたが。八月の例会案内書に「吾亦紅植えました。ありがとう」と、添え書きがあり、九月には「吾亦紅に新しい葉が出てきました」と、知らせてくれました。恵美さんの庭に根付いてくれたんだと、ほっとしました。例会では最後に「一人一言」がありますよね。私

は話し下手で、迷っていると恵美さんは聞き出すように話しかけてくれて助かりました。

恵美さんと会っていると、その場が明るくなり体調のことに気づいていませんでした。兒玉智江さんが「手術した身体だから事務局は大変だと思ふよ。私が担当するから」のことで、初めて病のことを知ったのです。

回復してから、積極的に「別冊おなご」の編集に携わっていただきました。令和五年九月二十日の例会に、NHK盛岡放送局が見えていましたね。その時、恵美さんは戦後の「おなご」の苦勞とか千三忌ことなど、たくさん話していましたね。側で英夫さんも領いていましたよ。十月二十三日に哲子さんから、「恵美さん中部病院の緩和病棟に入院したそうです」と電話をもらい、あんなに元気だったのにとびつくりしました。

笑顔の恵美さんに会えるように願っていました。残念で、十一月五日に訃報が入りました。残念で残念でなりません。哲子さんの車で満子さん

と私、二人で最後のお別れに自宅に伺いました。花に囲まれ、例会でお会いした時の顔で眠っていました。

「恵美さん、恵美さん」と呼んでみました。ほほ笑みながら今にも返事が、返ってくるようでした。

長い間、麗ら舎に足を運んでくださり麗子さんを支え私はいっぱい元気を頂きました。ほんとうにありがとうございます。

大好きな吾亦紅の花をながめながら、ゆっくりお休みください。

合掌

（以下、このページの下部には、非常に淡く、ほとんど読めないような文字が並んでいます。これはおそらく印刷時の誤りや、非常に薄いインクによるもので、本文とは関係のないと思われる内容です。）

（このページの下部には、非常に淡く、ほとんど読めないような文字が並んでいます。これはおそらく印刷時の誤りや、非常に薄いインクによるもので、本文とは関係のないと思われる内容です。）

俳句を詠む

佐藤 恵美

古池の奥を震わせ蝦蟇の声
沖繩の焼き物に挿すお茶の花
子等と行く立ち上がる街風薫る
青空や鳶一笛ふるわせり
ぼっくりとふくらむホオジロ愛くるし

(三月)

夫子孫芋種抱え植えにけり
日本列島一夜で 包黄砂かな
秋植えしチュウリップのいろ子等の顔
花吹雪青空泳ぐ幟のぼり
一年生気がかりなりし蝶ネクタイ

(四月)

竹の子の届く季節や茹でが香か
虫達の不在多くなりし鉢の空の巢も
G7世界の平和広島に
輸血の日サクランボ添えにぎりしめし
空梅雨の宙に漂うすいかずら

(五月)

四十雀大樹の中より鳴き通す
剪定の音は確かに九十代
梅雨入りして花数色数増しにけり
盛りなり亡き父と植えし皐月群
吹く風や玉ねぎにんにく取り込みし

(六月)

ねじり花巻き戻すなり雨しとど
六匹のめだか寄り合ふ蛸足紋
シオカラや尾を水に浸けスィーと飛ぶ
父と娘や大汗流す小宇宙
蝉の殻紫陽花山よりおみやげに

(七月)

竿灯や夜空ゆらゆらたましい鎮め
一族の墓参華浴衣の子
焼き肉やしゃべりっぱなしの夜の庭
誰のせい線状降水滞の黒土

(八月)

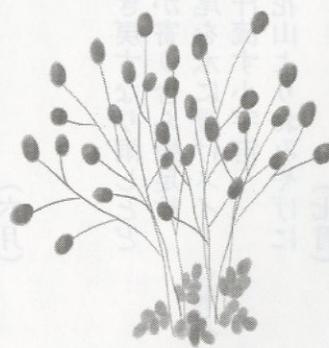
秋猛暑命を失うペット達
胆沢野やえぐね山超え秋日射す
胆沢の地春秋冬夏にぎわえり
見方にも敵(かたき)にもなる
夫搾る人蔘ジュースの快さ

秋の雨

(九月)

【2023年3月〜9月

みのむし句会より】



恵美さんを想って

高橋 哲子

2012年小原麗子さん宅に伺ったとき「来週震災のあった陸前高田に、麗ら舎の会員であった村上末子さんの墓参へ麗ら舎のみんなで行くので、哲子さんもどうぞ」と彼女に誘われた。3.11被災地三陸が気になっていましたから参加することにしました。当日、私は麗子さんと一緒に、水沢の駅まで行き待っていたマイクロバスに乗る。佐藤恵美さん宅を出発する。初対面の恵美さんは、マイクで今日の日程を話す。明るく弾んだ声は心地よいと感じました。高台の寺にある墓地に寄り眞吾さんが詩の朗読、花を手向け線香と、餅菓子をあげる。

次に佐藤直志さん宅を訪れた。消防団員の息子さんが犠牲になり、津波にあった跡地に自力で新築の

家を建てた。「一本松の見えるこの場所を生かされたものとして離れず自分が見守る役目がある」と話す。次に畠山画伯宅を訪問しました。

娘さんが津波に会いながらも生還され、父親の画伯は震災当時の娘の体験話から様子を絵に描き、それが自宅に展示されていました。

広田で「漂流ポスト」の活動をされている、赤川さんにもお会いして話を聞くことが出来ました。その後、村上末子さん宅の家の基礎のみが残る、その片隅に、ツワブキの株を見つける。佐藤恵美さんが掘り起こして一株持ち帰る。2年後には根付きツワブキが咲いたと、会員皆さんに報告してくれました。恵美さんのお庭にはたくさんのお花々がいつも開花していた、総会の会場ではお邪魔すると、お茶の時は手作りの料理が並び、皆さんお持ち寄りの菓子が美味しくて箸が止まらない、

麗ら舎月例会の案内のはがき、表に、活動日時の内容、裏には、写真、俳句が添えられる。会員の皆さんが例会の案内を楽しみにしているのがやっと私

もわかるようになりました。

令和になりコロナが流行し恵美さんは体調を崩していたのでした。

通院治療をしていると聞きました。

恵美さんと知り合ってから、俳句を教わりました。

恵美さんはお茶の先生、お琴も奏でると聞き、またお料理もプロでした。何でそんなに事をこなして元気で明るくいられるのだろうか、感心するばかりでした。

麗ら舎のおなご正月、ホテルの和室での会食、きちんと着こなした和服の恵美さんが見えたのでした。令和五年、体調が本調子でもないところ、NHKテレビ取材（盛岡局）では英夫さんのそばで、幼かった自分が見た戦争体験を、語る恵美さんの真実の言葉に何度聴いても胸が痛む思いになりました。

昨年秋一か月の間に、急変した恵美さん、入院したと聞きました。私は会いに行きました。体力が低下していたのは見て取れました。でも顔色のいい恵

美さんが居て、会話もしてもらいました。元気な姿を見せてくれた数週間後、恵美さんは逝ってしまいました。

遺影は、素敵なお召し物の、にこやかなお顔の恵美さんでした。私を見つめてくれていると感じました。合掌

麗ら舎読書会発行別冊おなご 39号で40年を迎えるこれまでの軌跡

◎別冊おなご1号(二九八五)(昭60) 11月

小原麗子さんを主に8名の会員で発行する「おりづるらん読書会」の活動の一つ、十一月「千三」の命日に第一回「千三忌」を持つことにした。一人の母が戦争で亡くなった息子

「千三」の墓を「母が亡くなれば千三を思い出してくれる人もなく、忘れ去られてしまおうと思い人通りの多い道に建てることよって、知らない人でも戦死した者の墓だと思い、戦争を思い出すだろう」とも。「千三忌」を持つことは、いま一度、母(セキ)の「意志の墓」の源へ気持を運ばせること、そこから自分の戦後を問い返してみることである。別冊おなご1号と千三忌は全国農業新聞「時の動き」「母たちのモニュメント」で取り上げられる。(談小原麗子)

◎2号(二九八六)(昭61)「おりづるらん読書会」

小原麗子さん投稿の中から、セキさん(高橋千三の母)の「意志の墓」によせて

麗子さんが墓守りを任じ、「千三忌」を持つにいたった経緯は、「姉」にこだわり続けてきたためと、いえるかもしれない。昭和60年、10月北上から八キロの地点、和賀の分譲地の一角に移った。何に導かれてか、セキさんの「意志の墓」に再会した。一度訪ねたとはいえ、十五、六年も前である。セキさんの墓が近くにあるとは予期せぬことだった。終の住処ついでと決めたこの地で再開した「意志の墓」ならば「墓守り」を任じよう。

住居の間は、おなごたちが(いや、男たちも)自由に集まれる場であり、友人たちが名付けて「麗ら舎」。

「麗ら舎」のメイン・テーマは、千三の命日である十一月四日の「千三忌」と定めた。

また、スローガンならぬ合言葉も復活させた。

「七度の飢饉うかつにあつたつてなあ、一度の戦争いくさにあうなつてよう」。

提唱者は当地横川目山口のハギばあさま(S 22年12月、70歳で没、「石ころに語る母たち」)。

別冊おなご1号、2号…麗子さんの意志が読み取れる号である。

長年、ぶれる事なく、39号まで、伝え続けている。

○3号(一九八七)(昭62) 6月 おりづるらん読書会

女たちの祈り、お産篇 石川純子あとがき

年に一度、テーマを定め、文集を残そうと話し合つての号。

たった一人男性から原稿よせてもらう。お産は男たちと共に切り開いてゆかねばならぬ問題。今後の力になる。

○4号(一九八七年)(昭62) □月

戦争との関り、渡辺真吾さん詩ホタルーホタルのきた日が命日。(二人目の男性参加)
この4号より、おりづるらん読書会から、新しい名称麗ら舎読書会に。

○5号(一九八八年)(昭63) 9月

特集 嫁ご 嫁・姑の問題改善のため人は結婚するのではない、ということについて

○6号(一九八八年)(昭63) 11月

題字(表紙)に、第4回千三忌記載

いろんな出来事があった、昭和が終る。戦争体験テーマ

それは戦後43年経、やっと語る事が出来るという思いか、それとも戦争体験者が老齢となり、今語らねばの思いか…

○7号(一九八九年)新元号平成元年

佐藤恵美さん「私の満州国」詩、小原麗子さんと吉岡しげ美さんとの縁
12年前シンガソングライターの彼女が麗子さんの詩に曲をつけ、歌ってくれた。

○8号(一九九〇年)(平2)

小原昭さん再訪、中国墓参、自衛隊の位置について

○9号(一九九一年)(平3) 特集・米 ・今まで一番投稿者が多い

減産するための“青刈”孕む稲を、自らも孕む性のおなごたちに刈らせる時代の不幸、日本の農業の在り方、おなごの声が：

○10号（一九九一年）（平3）11月
（平3・1・17）湾岸戦争始まる
盛岡市黒石野中学校三〜六 戦争とは 思い思いの声_{（イ）}が寄せられた。

○11号（一九九二年）（平4）カンボジアPKO：自衛隊派遣

南川比呂史さんの長篇詩「高橋セキの場合」戦争について語り合い、文集に記録として残していくこと

○12号（一九九三年）（平5）折居ミツさん、小原昭さん、満州での生活から帰国までの体験 ※火焰の娘

○13号（一九九四年）（平6）戦死者五十回忌の法要があちこちであった声聞く。会員それぞれの戦争についての投稿多し

○14号（一九九五年）（平7）戦後50年目

沖繩で発生した米兵三人による少女暴行事件
麗ら舎の人達のなかで、たちまちかつての日本軍隊「慰安婦」と結びつく。

○15号（一九九六年）（平8）千三忌にて「従軍慰安婦」についていまだ問題化出来ずにいる。

人は死ぬ生みつけ、人は死ぬのに生きつけ、死ぬ人間を殺す必要があるかと思巡る。「戦争」をなくそうとし、なくならないものを撲滅しようとしたたかうのも「人間」だということ。

○二人の女性 元軍隊慰安婦李・容洙さん_{（イ）}（韓国68歳）直接話を聞く。読書会の大きな課題

○鈴木光枝さん「劇国文化座」一九九三年（平5）から朗読劇公演を開始。朗読劇は菊池敬一・大牟羅良編『あの人
は帰ってこなかった』

七十八歳の大ベテラン女優 和賀の戦争未亡人たちがいまよみがえる

○16号（二九九七年）（平9）石川純子さん一九八九年昭和から

平成に変わった日 まつお 娼宅で聞書

○セキさんと中国残留日本人孤児 母とは…について

◎17号（二九九八年）（平10）

小原麗子さん…鏡第 姉の形見となった、戦争を説く

石川純子さん…十四回目を迎えた千三忌 麗ら舎読書会のもつても大事な行事麗子さんだけの千三忌前史と言えるもの

この号で二人共麗ら舎への念いを語っている

◎18号（二九九七年）（平11）

17号に続き、千三忌前史2 石川純子

和賀の里に言い伝えられてきた言葉「饑渴とは飢饉」のこと

七年も飢饉が続こうと、まだ戦争よりもまだ。平和への願いを、これほど切実に言い表した言葉はない。この言葉「千三忌」のメインテーマとして掲げてきた。

○『わがかくし念仏』…秋田戦争の言い伝え ハギ婆様 戦争の語り部

千三忌のたび皆で戦争の聞き書き、文集にまとめてきたのは、語り部となる一つの修行だったと思える

※『わがかくし念仏』日清戦争…から10年日露戦争

「市太は台湾で戦病死、続く舎弟の徳太まで日露のつゆと戦死で、西根の山の西在郷にただ一軒の不幸の家。われら二人の花嫁は一時に曾祖父にあわまかれ（舅犯嫁れ①）、共に子供を孕んでは、ほうずきの根の毒使う、修験の女にまびかすも、身も心もよわりはて、ついに命とかえられず、共々舅の子を産して、この世に生きる修羅の家。」

①「舅犯嫁れ(あわまかれ)」：筆者石川純子による当て字まさしく字から想像できる

○19号(二〇〇〇年)(平12)

○千三忌前史3：『石ころに語る母たち』の著者小原徳志さんから聞き書き

生活記録運動から生まれた本。これは残すべき本、貴重なもの

折居ミツ『満州に幼な子を残して』小原昭『ホロンバイルは遠かった』

○千三忌での駄句掲載、男性の投稿多し、折居次郎、齋藤彰吾

瀬川富男、小原忠雄

○20号(二〇〇一年)(平13)千三忌前史3、石川純子、後藤野開拓の公民館活動について折居次郎、ミツ夫妻に聞く。
・齋藤政一さん(77歳) 広島で原爆に遭い父が捜しに
生々しい体験、残すべき証言記録

○21号(二〇〇二年)(平14)

○22号(二〇〇三年)(平15)

◎23号(二〇〇四年)(平16)聞き書きの記録が目につく

渡邊満子□・夫から義父のこと 石川純子□千三忌前史その7

「南無阿弥陀仏」がいいとアドバイスしたのはうちの母です：の高橋正幸さん

※とても興味そそられる純子さんの聞き書きです。

○24号(二〇〇五年)(平17)戦後六〇年

様々な六〇年が語られ記録される。千三忌憲法9条9人

二十四条3人、わたしの八月十五日6人、石川純子、千三忌前史その8

○25号(二〇〇六年)(平18) 四人の女性を通して見える「戦争」
小原麗子あとがきで書き記しているのは、二〇〇四年、イラク戦争
に派遣された日本自衛隊の身内の方、アメリカで兵士となって
戦争に行った息子を案じる母の声、二十四歳で戦死した子の事

「平和」である今「平和でない」今 戦争がある限り「平和」ではない

石川純子 千三忌前史その9 セキさんの姪にあたる高橋才誉さん(初めて身内の方)

○26号(二〇〇七年)(平19) 陸曹長は語る陸上自衛隊について
またポーランドの紹介 戦争を知らない年代の方の投稿あり

○27号(二〇〇八年)(平20)

10月1日石川純子さんが亡くなった 麗ら舎読書会の屋台骨でした。(麗子さんの言葉)

※いのちの海とポドローテク故石川純子さんを思いながら、田村和子

この号に寄せてくださった恵美さん、つか子さん、満子さんそれぞれの文に胸を打たれる。

○28号(二〇〇九年)(平21)

○小崎順子 父は犬に食われ、母は糞壺にかくれ、衝撃的な体験発表

○麗子さん、純子さん、麗ら舎会員の方々がコツコツとしたためてきた、文集及び活動が柳原恵さんによって再び引き継がれた号である

「戦後」に生きる者の責任として「記憶」する

○29号(二〇一〇年)(平22) 小原麗子 記録あとがき

男性による投稿多し 再度読んでみたくなる皆さんの文集である

◎30号(二〇二一年)(平23) 東日本大震災、3月11日

特集・戦争・災害 それぞれの思・記録する

会員で麗ら舎設立当所から陸前高田から麗子宅へ通ってきていた
村上末子さん未だ行方不明

◎31号(二〇二二年)(平24) 東日本大震災一年目

◎特集 戦争・災害 新しい会員の方増える(40歳代、50歳)

◎小原昭さん死去(85歳)

昭さんを語ることは、「昭和史」を語ることです。

◎32号(二〇一三年)(平25)

原発、戦後の聞き取り、記録 千三忌の駄句

◎33号(二〇一五年)(平27)

◎戦争を読む15 斎藤彰吾「二〇〇〇年」から「十五年」ずうーと続けて書いて下さった。

◎水沢2ホールにて劇団「乙の風」により「千三の墓」が公演される

戦後七十年、セキさんは舞台で何を語るでしょうか。

◎34号(二〇一六年)(平28)

◎福島第一原発による被害牧場を視察して

『希望の牧場・ふくしま』レポーター児玉智江

◎「母」をめぐる雑感 柳原恵

※麗子さん「くも膜下出血」で初めての入院(80歳)

あとかきの詩(うた) おばあさん……今はスロースローの毎日

元気で。

○ 35号 (二〇一七年) (平29)

麗子さん農民文化賞受賞記念特集号

「受賞によせて」の原稿と従来の文集で多くの方々から寄せられた。

ページ数にすると161ページは最高34号までは一人で編集をしていた

麗子さん、35号からは、編集委員を各担当を受け持ち別冊

おなご35号が生まれました。記念の一冊

○ 36号 (二〇一九年) (平31) 表紙カット小原麗子

小平玲子さん事務局

※二〇二〇年四月二十日突然倒れて旅立つ

○ 37号 (二〇二二年) (令3) (元号、令和となる二〇一九年五月)

○二〇二〇年(令2) 新型コロナウイルスの感染症 日本を初め全世界に

麗ら舎の例会も休会となる 千三忌も同様

別冊おなご37号遅ればせ会員一眼となって発行する。

○ 38号 (二〇二三年) (令5)

第三十九回【千三忌】駄句を詠む

和賀の奥まで来て語る千三忌

ふくれ女

秋雨や千三の墓の人・花さかり

麗ら舎の集い三十九年の足跡カメラ入る

京都在住の友研究の証 陽光にと

千三忌に仏菓子沢山旨くてお茶する

亡き先輩の詩作集改に読み更ける千三忌かな

おてて

雨が降る和気あいあいと駄句をよむ

柳原さん京都からありがと

ほんとうにいい会だね麗ら舎読書会は

哲子さん手作りのおでんおしかったよ

吾亦紅

八重咲の秋桜も笑む千三忌

セキさんの重い引き継げ千三忌

セキの墓今年も集いおなごたち

柳女

白鳥も来し皆とも会えた千三忌

元気で会えた恵さん千三忌を継ぐ

取材のカメラに笑顔、時々忘れるマスク姿

色づく景千三忌の墓のコスモスに迎えられる

猛暑の中、稲は暑さに負け二等米

野々小路

いちじくの甘露煮ひかる千三忌

千三忌残れる虹の足元に

南にも北にも(おなご)千三忌

日向子

○15号(二〇二七年) (平)

かわいねどっかで見たよあつ、テレビ

はまださん、文学館では、苦勞さん

お二人逢えてうれしや千三忌

岩手県、日本の千ベツトと言われたが現代は

大谷選手、恵さんが居る

麗子先生優しい笑顔の千三忌

けんこう様今日もお世話になりました。

テル女

千三にお願いを込めて平和祈願

千三がみんなの心つなげてる

同じ空、ウクライナには戦車入る

幾年もうらら舎続け千三忌

男性も二人参加で若返る

母子草

二〇二三年 十月 二十一日 作成

第三十次(一)十三忌(一)若返り

日ゆき

十三忌(はら)の十三忌
十三忌(はら)の十三忌
十三忌(はら)の十三忌

日ゆき

十三忌(はら)の十三忌
十三忌(はら)の十三忌
十三忌(はら)の十三忌

十三忌(はら)の十三忌
十三忌(はら)の十三忌
十三忌(はら)の十三忌

日ゆき

十三忌(はら)の十三忌
十三忌(はら)の十三忌
十三忌(はら)の十三忌

あとがきにかえて

39号「別冊おなご」は従来の形を少し変え、特集を組むことに編集しました。

なぜ？と言いますと原稿の集まりが全く無いと言うことは文集発行にはほど遠い話ではないかとなってしまうました。

ここでやめるか！それとも延長するか！迷う日が続きかと言って何一ついい案はせず、月日だけが経ってしまいこらへんで早く決断せねば、と考えていたところ令和5年の7月北上現代詩歌文学館企画展「詩人・斎藤彰吾と小原麗子の活動」〜北上から世界へ。昨日から明日へ〜」が開催されました。この企画の編さんに携わった早稲田大の大門正克特任教授と法政大大原社会問題研究所山本唯人特任准教授と麗子さん、彰吾さんとの座談会記録、大門、山本両氏の寄稿文を読み終えた時これをそのままにしておくのは「もったいない！」と考え「別冊おなご39号」にぜひ載せたいとの思いが増してきました。

早速文学館の豊泉豪さん、濱田日向子さんにお話ししたところ快く了承して下さいました。その上パンフレットのまゝとめまでしていただく結果になってしまつて本当に申し訳なかったと思ひました。ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

二人展の縁でNHK盛岡放送局菅谷鈴夏アナウンサーから取材があり、麗ら舎月例会と「千三忌」の様子等撮影することになり麗ら舎に約4か月足を運んでくださいました。NHK盛岡では三度の放映、東北六県NHKでも放映されるその後大きな反響と感想を頂きました。

この放送がきっかけとなり朝日新聞社盛岡総局伊藤恵里奈記者との出会いがありました。

この年（令5・10）の国際女性デーに新聞掲載あり、小原麗子と麗ら舎が紹介されました。

ひと



岩手県北上市にある自宅は「麗ら舎」と呼ばれる。「おなごが集い、本を読み語り、文章を書き、自らの『生』を取り戻す場」を、この40年続けてきた。麗ら舎の重要なテーマは、反戦だ。終戦の約1カ月前、入院中だった姉が自ら命を絶った。夫が戦死したうわさを耳にした直後に、「銃後の守りで、誰よりも働かななくてはいけない嫁の身だった。追い詰められたのでしよう」

「おなご」と戦争を書き続ける詩人

おばら 小原 麗子 さん(88)

「家制度」は女性の怨徒で成り立つ。だが自分は一人の人間として生きたい。農協で働き、「嫁」にいかない選択を貫いた。「ゆるして下さい がつちやあー」は縁談が舞い込み始めた当時に母に向けて詠んだ詩だ。「だのに、わたしにひそむ血は、納得がいかにぬ、納得がいかにぬ」と叫び、たぎってくる。「詩を作るより田を作れ」と言われても、小さな書齋で書き続けた。「農村の嫁の悲劇が生まれる原因は、多くの家族的な美しさの中にもある」。家族の調和が女性の犠牲に支えられる矛盾を指摘した。麗ら舎の近所に、念仏が刻まれた墓がある。一人息子の高橋千三に戦死されたセキという女性が、戦争と戦死者が忘れられることのないようにと願って置いたと知った。彼女の遺志を語り継ぐため、毎年「千三忌」を開く。

「麗ら舎の仲間が友達というより共感者。この人たちの支えがあるからこそやっつけていける」。今年も最新の会報誌を出す。写真 伊藤恵里奈

こうして人と人との結びつきがあり、別冊おなご39号(特集)が完成しました。皆さんのお力があったの事と思っています。この思いを先輩から引き続き今度は私たちから次世代へ受け継がれていくことを願っています。

一昨年、昨年と出版を引き受けて下さった あべ印刷株式会社様には、今年もお世話になりました。ありがとうございます。

(佐藤 弘子)

小原麗子さんと麗ら舎、別冊おなご初版（1号）から携わってきた（注）石川純子さんのこの言葉今（令6）なお継
続されている。

千三の命日は、「千三忌」と名付けられた。
戦争を考える日となっている。

この墓を、意志の墓と受け止め、その墓守と任じた畏友の小原
麗子さんが、主催する年に一度の反戦の集（つどい）である。
「千三忌」を、続けて来なかったらこのまま埋もれてしまつて
いたかもしれない。

注

（石川純子 一九四二〜二〇〇八）

編集後記

麗ら舎読書会の活動の一つは、「文集を発行」することです。

文集発行のためには、文章を投稿していただくことですが、今回は全く原稿が集まらず事務局の例会案内のほがきで再度投稿依頼するもなかなか思い通りにはいきませんでした。編集を担当した私たちにとっては何とも歯がゆいことでした。そこで私たちは苦渋の選択として麗ら舎創設当時から現在までの「別冊おなご」の記録を読むことにしました。

初版を目にしたとき、40年継続してきた事を理解しました。38号までの総まとめを会員でもある柳原恵さんが読んだ森崎和江」の原稿を寄せていただきました。さらに「千三忌」でのお話のまとめとして「東北のおなごたち

少しづつですが発行までに行きつけそうな感触を得ながら何度も構成しなおしました。

そのさなか、テレビの取材があり活動の内容と「千三忌」が放映されました。また、これを機に新聞社からの取材もあり、皆さんと麗ら舎の話をしたことであらためて別冊おなごの編集に取り掛かることができました。編集の一員として微力ながら携われたことに感謝しています。

(高橋 哲子)

編集委員

主宰

小原 麗子

編集委員

渡邊 満子

編集委員

佐藤 弘子（事務局）

編集委員

高橋 哲子（会計）

別冊・おなご 39号

発行日 2024年8月31日

発行者 麗ら舎読書会

発行所 岩手県北上市和賀町長沼5・343・3

TEL/FAX

0197・73・6673

